

平成15年度
市原市内遺跡発掘調査報告

姉崎山新遺跡
潤井戸遺跡群下宿地区
潤井戸西山(草刈尾梨)遺跡
東関山古墳

2004

市原市教育委員会

平成15年度

市原市内遺跡発掘調査報告

あね さき さん しん
姉 崎 山 新 遺 跡
うるいど しもじゆく
潤井戸遺跡群下宿地区
うるいどにしやま くさかりおなし
潤井戸西山(草刈尾梨)遺跡
とう かん やま こ ふん
東 関 山 古 墳

2004

市原市教育委員会

序 文

千葉県の中央部に位置し、「王賜」銘鉄剣や上総国分寺・尼寺に代表される埋蔵文化財の宝庫として知られる市原市は、温暖な気候と豊かな自然環境を背景に、縄文時代のいにしえから永く人々に愛され現代に至った地でもあります。

しかし、一方では、本市の位置する地理的条件から、高度経済成長期には首都圏のベッドタウン、或いはレジャー施設としてのゴルフ場建設などによる爆発的な大規模開発計画により、多くの貴重な遺跡が壊滅の危機を迎えたこともありました。現在、この大規模開発の波は沈静化しつつありますが、今後とも開発と埋蔵文化財の保護とを調和しながら、後世に伝え残すことは現代に生きる我々に課せられた大きな使命の一つであります。また、開発との調和によって得られた貴重な考古資料を効果的に活用するため、生涯学習の一環として広く市民の皆様に公開し、考古資料の発する情報を市民の郷土知識として還元していかなければならないとも考えております。

本書は、国庫ならびに県費の補助をうけ実施した市内遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。本市の歴史を紐解く一助として、埋蔵文化財の保護・普及のため、広く市民の皆様に活用されれば幸いです。

最後に、今回の発掘調査、および本報告書の刊行に際しご指導、ご協力を賜りました文化庁記念物課、千葉県教育庁文化財課、ならびに関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成16年3月

市原市教育委員会
教育長 山中 齊

例 言

1. 本書は、国庫および県費の補助金を受け、市原市教育委員会が主体となり実施した市内に所在する遺跡における発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理作業は、市原市教育委員会の依頼により財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書刊行は市原市教育委員会で行った。
3. 本報告書に所収の調査は下記の通りである。
 - (1) 姉崎山新遺跡（センター調査コード セ373）市原市姉崎1, 714- 5
集合住宅建設に伴う確認調査。対象面積1, 021㎡のうち102㎡の確認調査を実施した。
調査期間：平成15年4月14日～4月22日。調査担当 小橋健司
 - (2) 潤井戸遺跡群下宿地区（センター調査コード セ376）市原市潤井戸字下宿686- 2、686- 4
個人住宅建設に伴う確認調査。対象面積397. 48㎡のうち40㎡の確認調査を実施した。
調査期間：平成15年5月12日～5月19日。調査担当 高橋康男
 - (3) 潤井戸西山（草刈尾梨）遺跡（センター調査コード セ378）市原市草刈194- 1の一部、195- 1の一部
店舗建設に伴う確認調査。対象面積3, 500㎡のうち350㎡の確認調査を実施した。
調査期間：平成15年7月2日～7月16日。調査担当 小川浩一
なお、市原市埋蔵文化財分布地図上での今回調査地点の遺跡名は、潤井戸西山遺跡が正しい。よって本報告書では以後、潤井戸西山遺跡として報告していく。
 - (4) 東関山古墳（センター調査コード セ384）市原市菊間2751- 2
個人住宅建設に伴う確認調査。対象面積460㎡のうち60㎡の確認調査を実施した。
調査期間：平成15年11月19日～11月28日。調査担当 木對和紀
なお、東関山古墳は菊間古墳群中に存在するが、今回の調査範囲は東関山古墳に限った地点であるため、本報告書での遺跡名は東関山古墳に限定した。
4. 本書の編集・執筆は木對和紀が行った。
5. 本書に所収した中世土器・陶器類の報告方法については、当センター櫻井敦史の指導に従った。
6. 本書で使用した地形図は国土地理院発行1：25, 000蘇我・姉崎及び市原市発行1：2, 500市原地形図である。
7. 本書で示す北は、草刈尾梨遺跡が座標北、それ以外は磁北である。また、水準は潤井戸遺跡群下宿地区が任意、それ以外は海拔からの高さを示す。
8. 挿図におけるスクリントーンの利用については、図中に示した。また平面図と土層断面図の「K」は攪乱を表している。

本文目次

第1章 調査遺跡と周辺遺跡	1
第2章 1 姉崎山新遺跡	7
2 潤井戸遺跡群下宿地区	9
3 潤井戸西山（草刈尾梨）遺跡	12
4 東関山古墳	17

挿図目次

第1図「平成15年度市内遺跡」調査遺跡と周辺遺跡位置図1（1：50, 000）	3
第2図「平成15年度市内遺跡」調査遺跡と周辺遺跡位置図2（1：50, 000）	3

第3図	姉崎山新遺跡調査地点 (1:5,000)	7
第4図	姉崎山新遺跡遺構配置図 (1:200)・遺構実測図	8
第5図	姉崎山新遺跡遺物実測図	9
第6図	潤井戸遺跡群下宿地区調査地点位置図 (1:5,000)・遺物実測図	10
第7図	潤井戸遺跡群下宿地区遺構配置図 (1:200)・遺構実測図	11
第8図	潤井戸西山 (草刈尾梨) 遺跡位置・遺構配置・土層断面図	13
第9図	潤井戸西山遺跡環濠想定図 (1:1,000)・遺構配置図	14
第10図	潤井戸西山 (草刈尾梨) 遺跡遺構実測図	15
第11図	潤井戸西山 (草刈尾梨) 遺跡遺物実測図	16
第12図	東関山古墳調査地点位置図 (1:1,000)・遺構実測図	19
第13図	東関山古墳遺構実測図	20
第14図	東関山古墳周溝復元図 (1:1,000)・遺物実測図	21
第15図	東関山遺物実測図	22

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	2
第2表	山新遺跡 (セ373) 中世非掲載遺物	9
第3表	東関山古墳中 (セ384) 世非掲載遺物	19
第4表	遺物観察表	24
第5表	遺跡・遺構別遺物集計表	28

図版目次

図版1	姉崎山新遺跡調査前 2トレンチ調査状況 2トレンチ調査状況 3トレンチ調査状況 2	1トレンチ調査状況 2トレンチ中央部遺物出土状況 3トレンチ調査状況 1
図版2	潤井戸遺跡群下宿地区7トレンチ(北より) 潤井戸西山遺跡調査前 2トレンチ (南より) 4トレンチ柱穴検出状況	7トレンチ (南より) 1トレンチ (南より) 1トレンチ溝検出状況
図版3	4トレンチ溝検出状況 6トレンチ溝検出状況 8トレンチ溝検出状況 8トレンチ中央部遺物出土状況 1	5トレンチ (東より) 7トレンチ溝検出状況 8トレンチ北側溝土層断面 同2
図版4	東関山古墳周溝部調査前 1トレンチ土層断面 3トレンチ東端部遺物出土状況 3トレンチ地下式墳検出状況 1	1トレンチ検出状況 2トレンチ完掘状況 3トレンチ東端部遺構検出状況 同2
図版5	3トレンチ土層断面 姉崎山新遺跡 (セ373) - 6 姉崎山新遺跡 - 11 潤井戸西山遺跡 - 1	東関山古墳南周溝立ち上がり 姉崎山新遺跡 - 10 潤井戸西山遺跡 (セ378) - 2 潤井戸西山遺跡 - 3
図版6	姉崎山新遺跡 - 8 ~ 9, 潤井戸遺跡群下宿地区 - 1 ~ 25, 潤井戸西山遺跡 - 11 ~ 24, 潤井戸西山遺跡 - 25 ~ 31, 東関山古墳 - 7 ~ 45	潤井戸西山遺跡 - 4 東関山古墳 (セ384) - 21

第1章 調査遺跡と周辺遺跡

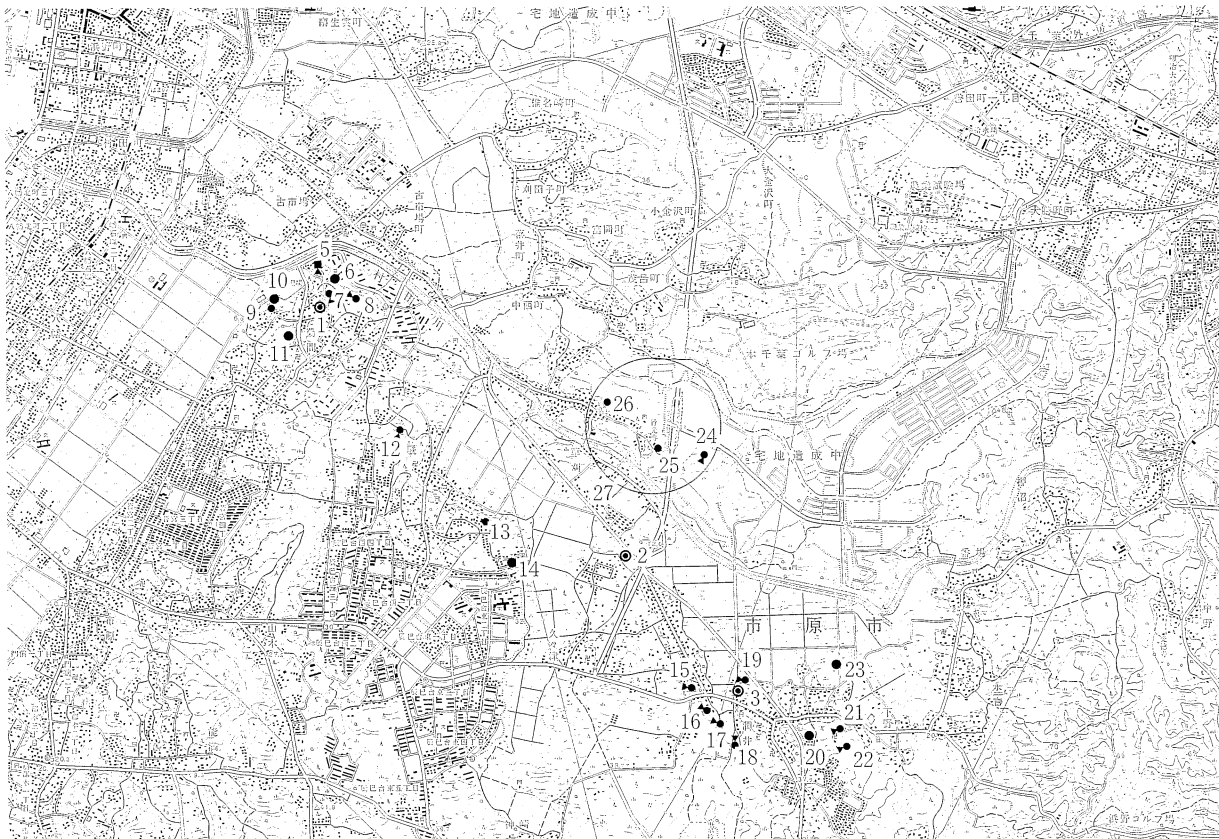
今年度の調査遺跡は、菊間・潤井戸地区と姉崎地区であり、市内でも第一級の遺跡が集中する地域で行われた。市内北部を流れる村田川の中流から下流域は、『和名類聚抄』における市原郡菊麻郷に比定される地域で、大型前方後円墳の集中度から『国造本記』における菊麻国造およびその前身豪族の奥津城として捉えられている菊間古墳群が存在し、周囲一帯に濃密に分布する古墳群及び集落跡などから遺跡群が構成されている。このうち、今回調査の東関山古墳に近接し、かつ関連性が考えられる古墳には、粘土槨2基より、内行花文鏡・珠文鏡・石釧・大刀・剣・鉄斧・槍鉋・水晶製勾玉・管玉・ガラス玉などを検出し、全長60m前後の前方後方墳と推定される新皇塚古墳が存在する。一方、今回調査の草刈尾梨遺跡・潤井戸遺跡群下宿地区周辺では、和泉式期の豪族居館跡と想定されている西山・草刈尾梨遺跡や、対岸ではちはら台遺跡群^(註1)など、極めて重複率の高い複合遺跡が調査されており、菊間遺跡や大厩遺跡を含めて弥生時代以降の周囲一帯は、ひとつの文化の中心的存在であったことを垣間見ることができる。

市内西部の椎津川下流域の姉崎周辺は、延喜式内社の姉崎神社が存在し、『和名類聚抄』における海上郡馬野郷に比定される地域である。この地域には県下でも有数の大型前方後円墳が築かれ、先の村田川流域同様、上海上国造およびその前身豪族の奥津城として捉えられる姉崎古墳群が存在し、その主要が存在する台地上に濃密に分布する古墳群及び集落跡などから遺跡群が構成されている。また、近年の低地部分の調査成果により、これまで稀有とされていた低地部分にも極めて密度の濃い古墳群や集落跡などが存在することが明らかとなった。まず姉崎二子塚古墳西方100m程の地点の低地に存在する上野合遺跡では、当域の台地上では稀有だった和泉式の竪穴式住居3軒と2基の墳丘を喪失した円墳が検出されており、同じく低地の妙経寺遺跡でも縄文時代中期初頭の貝塚や前方後円墳1基を含む計11基の古墳群を検出し、古くは妙経寺古墳とされた大型前方後円墳は存在しなかったが、かつてマウンドを保持した古墳群は存在していたことが裏付けられた。また姉崎棗塚遺跡では中世墓壇群と多量の人骨を検出し、当時の埋葬形態は横臥埋葬が主体であることが確認され、続く姉崎山新遺跡では、縄文晩期の包含層や弥生時代中期の遺構が検出され、台地上での空白時期の遺構遺物は、低地に所在するという前提が成立しつつある。今回調査した姉崎山新遺跡は、縄文晩期の包含層や弥生時代中期の遺構を検出した地点に近接し、山新遺跡としての遺跡範囲の縁辺部に存在する。

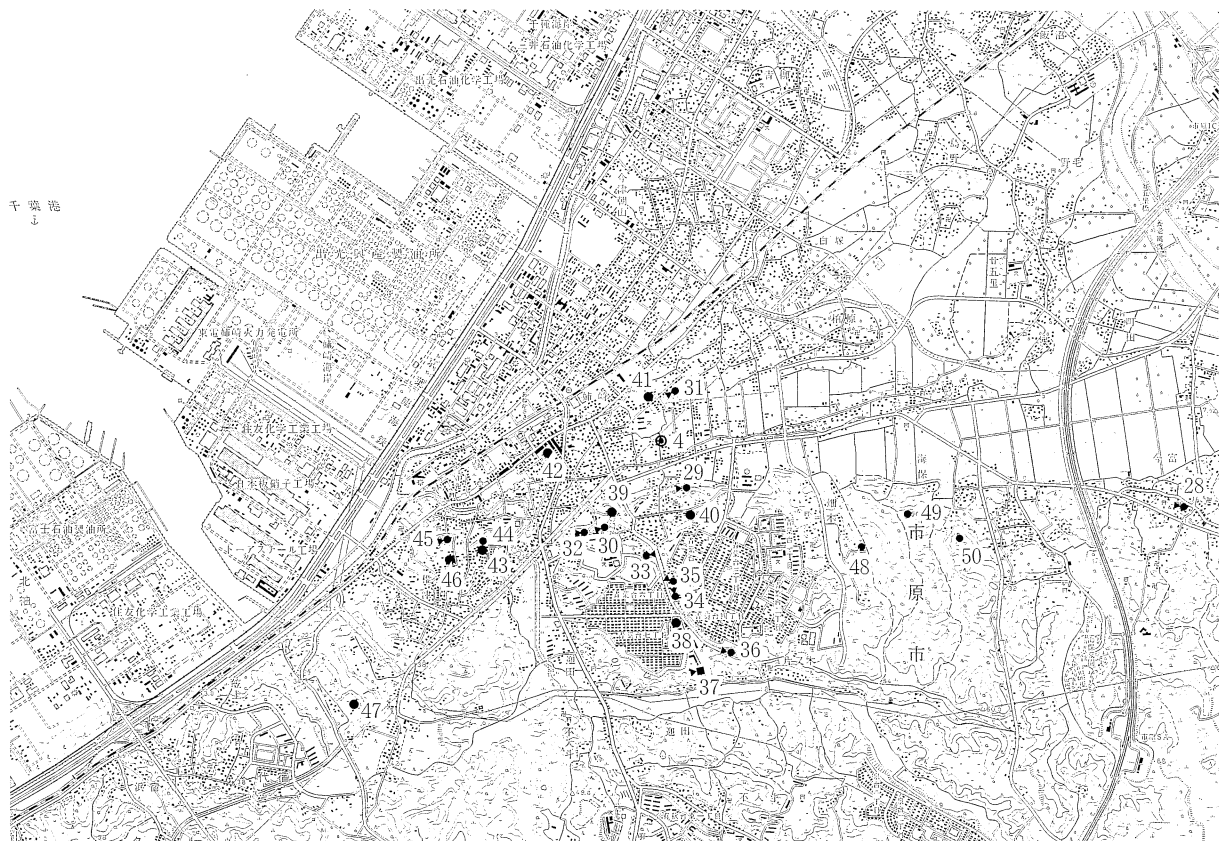
古墳では、測量調査を含め姉崎天神山古墳・釈迦山古墳・姉崎二子塚古墳・山王山古墳・原1号墳・鶴窪古墳・六孫王原古墳などが調査されている。その変遷は、墳形より今富塚山古墳と同時期か若干後出する時期の所産と捉えられる姉崎天神山古墳(別名台大塚古墳130m)。前方部が未発達で後円部の内部主体は粘土槨、推定9m前後の割竹形木棺と想定され、布留系高坏を検出した釈迦山古墳(93m)。前方部と後円部に内部施設が存在し、前方部より直弧文付石枕1・立花2・銀製垂飾付耳飾一對・瑪瑙勾玉1・直刀2・鉄鏃140・轡・短甲片・桂甲片・頸鎧・肩鎧、後円部より蟠蛇鏡1・変形文鏡2・硬玉製勾玉7・滑石製大型勾玉1・管玉4・琥珀製棗玉5・ガラス小玉300余・滑石製刀子5・有孔円盤2・白玉3・立花4・石枕(伝聞)・金銅製金具残欠・直刀片2・鉄鏃1・金銅製青片1・短甲片・桂甲片等を検出し、墳丘内の円筒埴輪列より検出された高坏が和泉式として捉えられ、5世紀中葉以前に位置付けられる姉崎二子塚古墳(110m)。百済武寧王陵出土単竜式環頭大刀の系譜に連なり、蕨手

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	主な遺跡の内容	備考
1	東間山古墳	これまで全長80mの前方後円墳とされたが、今回調査で全長90mに復原可能。	平成6年度測量調査。文献1・2
2	西山・草刈尾梨遺跡	今回調査で2万㎡の環濠集落に復原される。環濠内に和泉式期の豪族居館跡が存在する。	昭和59・平成2年度調査。文献3
3	潤井戸遺跡群下宿地区	本報告書。全長35mの宿後古墳（前方後円墳）に隣接する。	
4	姉崎山新遺跡	本報告書。中世溝など検出。	平成9・11年度調査文献4
5	新皇塚古墳	全長60m前方後円墳と推定。粘土槨2基。内行花文鏡・珠文鏡・底部穿孔壺二重口縁等。	昭和48年度調査。文献5
6	菊間遺跡	弥生住居49軒・方形周溝墓2基・古墳住居6・古墳4基他。	昭和48年度調査。文献5
7	北野天神山古墳	全長90m前方後円墳と推定。別名権現山古墳。	平成6年度測量調査。文献1
8	姫宮古墳	全長52m前方後円墳。	平成6年度測量調査。文献1
9	菊間天神山古墳	径45m円墳。5世紀末葉の円筒埴輪を伴う。	平成6年度測量調査。文献1・6
10	菊間手永遺跡	弥生住居47・古墳前期17・古墳後期～平安10軒。	昭和58年度調査。文献6
11	菊間廃寺跡	軒丸瓦は素弁十三葉蓮華文。8世紀前半の創建と推定される。	文献7
12	大厩二子塚古墳	全長70m前方後円墳。	平成6年度測量調査。文献1
13	大厩浅間様古墳	径44m円墳。全長11mの割竹形木棺内より珠文鏡・石釧等検出。	昭和59・平成2年度調査。文献8
14	大厩遺跡	弥生住居56・古墳前期1・中期1・後期11軒・古墳9基他。	昭和48年度調査。文献9
15	潤井戸杉山古墳	全長56.5m前方後円墳。	平成11年度測量調査。文献10
16	山王後2号墳	全長42m前方後円墳。未調査。	文献11
17	山王後1号墳	全長33m前方後円墳。木棺直葬。直刀・鉄鏃検出。	昭和52年度調査。文献12
18	潤井戸小谷1号墳	全長40m前方後円墳。下総型埴輪検出。	昭和63年度調査。文献13
19	宿後古墳	全長35m前方後円墳。未調査。	文献11
20	潤井戸上横峰遺跡	円墳3・方墳2基等。	平成元年度確認調査。文献14
21	下野寺谷1号墳	全長44m前方後円墳。別名本泰寺古墳。未調査。	文献11
22	下野寺谷10号墳	全長32m前方後円墳。未調査。	文献11
23	潤井戸鎌之助遺跡	竪穴住居弥生12・古墳35・奈良6・平安3軒。掘立柱建物跡17棟他	平成10年度調査。文献15
24	草刈11号墳	全長35mの前方後円墳。	保存整備
25	草刈3号墳	別名六之台古墳。径35m高さ6m円墳。碧玉製釧・管玉・直刀・土師器・須恵器他	昭和55年度調査。消滅。文献16
26	草刈1号墳	別名草刈大塚。径38m高さ7m円墳。鉄銚・鉄剣・鉄製農耕具・玉類他	昭和59年度調査。消滅。文献17
27	ちはら台遺跡群	草刈遺跡・草刈六之台遺跡・川焼台遺跡他	昭和55年度以来調査。文献16ほか
28	今富塚山古墳	全長110m前方後円墳。主体部は木炭槨？ 底部穿孔土器検出。	平成3年度一部調査。文献18
29	姉崎天神山古墳	全長130m前方後円墳。	昭和49年度測量調査。文献19
30	釈迦山古墳	全長93m前方後円墳。粘土槨。推定9mの割竹形木棺。布留式高坏検出。	平成7年度一部調査。文献20
31	姉崎二子塚古墳	全長110m前方後円墳。前方部と後方に主体部。後円部出土直弧文付石枕は重文。	明治以来数度調査。文献21
32	上総山王山古墳	全長69m前方後円墳。粘土槨。銀装卑竜式環頭大刀・金銅製冠・鉄鏃・胡禄	昭和38年度調査。消滅。文献22
33	鶴窪古墳	全長60m前方後円墳。	昭和56年度一部調査。文献24
34	原1号墳	全長70m前方後円墳。直刀・刀子・円筒・形象埴輪	昭和48年度調査。消滅。文献24
35	原2号墳	前方後円墳、規模不明。	未調査、消滅。文献11
36	堰頭古墳	全長45m前方後円墳。未調査。	文献11
37	六孫王原古墳	全長45m前方後円墳。横穴式石室。金銅製馬具片・直刀・刀子片・鉄鏃片・須恵器	昭和45・平成2・3年度調査。文献25
38	毛尻・六孫王原遺跡	弥生～古墳中期住居跡114軒・方形周溝墓20基・木棺墓6基他	昭和59・平成年度調査。文献26
39	姉崎宮山遺跡	弥生～古墳終末期住居跡10軒以上・掘立柱建物跡3棟・土坑4基・溝1条他	平成2年度調査。文献27
40	姉崎東原遺跡	全長33m前方後円墳。底部穿孔二重口縁壺他出土。弥生～古墳住居跡25軒他。	昭和62・平成2年度調査。文献28
41	姉崎上野合遺跡	古墳中期円墳2基・竪穴住居跡3軒	平成元年度調査。文献29
42	姉崎妙経寺遺跡	中期から後期円墳10基、前方後円墳1基。	平成6～11年度調査。文献30
43	椎津茶ノ木遺跡	竪穴住居総数165軒。古墳後期主体。	平成2・10年度調査。文献31
44	椎津稻荷山古墳	径41m・高さ4.5m以上の円墳。	平成2・10年度一部調査。文献31
45	外柳古墳	全長85m後円部高さ3m 前方後円墳。未調査。	文献11
46	椎津五霊台遺跡	古墳前期竪穴住居30軒・古墳後期～平安竪穴住居12軒・中世方形竪穴1軒・古墳5基他	平成8年度調査。文献32
47	椎津中台遺跡	奈良・平安時代竪穴住居17軒、掘立柱建物跡10棟他	平成10年度調査調査。文献33
48	畑木小谷遺跡	古墳4基 弥生～古墳中期竪穴住居27軒 縄文早期炉穴9基 木棺墓1基	平成10年度調査調査。文献34
49	海保大塚	円墳？径60m。現状六角形。	平成元年度確認測量調査。文献35
50	海保3号墳	径30m、高さ3.8m円墳。木棺直葬・鉄剣・鉄鏃・勾玉・管玉・ガラス小玉他	昭和43年度調査。文献36



第1図 「平成15年度市内遺跡」調査遺跡と周辺遺跡位置図1 (1:50,000)



第2図 「平成15年度市内遺跡」調査遺跡と周辺遺跡位置図2 (1:50,000)

風の鞘文様を施す銀装単竜式環頭大刀1・木装大刀3・刀子5・毛抜き型鉄器1・胡録2・鉄鏃45本以上・金銅製冠1・櫛・銅地銀覆耳環一対・変形四獣鏡1・埴輪等を検出し、副葬品の年代観から6世紀前半代に比定し得る山王山古墳(69m消滅)。全長およそ70m、円筒・形象埴輪を保持し、3段築成工法を採用?しながら、粘土床と推定される内部施設からは直刀1本と刀子片などの僅かな遺物しか検出されなかった原1号墳(6世紀中葉消滅)。全長60m前後を測り円筒・形象埴輪を有するものの後円部を大幅に流失する鶴窪古墳(別号蓮ヶ窪古墳・6世紀後葉)。7世紀前葉に比定されるものの未調査で詳細不明な堰頭古墳(全長45m・前方後円墳?)。乱掘著しい横穴式石室中より金銅製馬具片・直刀片・刀子片・鉄鏃片を、前方部墳頂部より須恵器大甕を検出し、7世紀中葉に比定される六孫王原古墳(全長45m、前方後方墳)として捉えられている。

この他にも未調査のまま消滅してしまったとされる古墳が周辺には多々存在したといい、また、椎津川を挟んだ対岸にも全長85m前後の外柳古墳や、径40m強の円墳と推定される伝石枕出土の椎津稻荷山古墳が存在するなど、狭義の姉崎古墳群以外にも周囲には大型古墳が存在している^(註2)。また、周辺の遺跡としては、姉崎毛尻遺跡・姉崎六孫王原遺跡・姉崎原遺跡・姉崎東原遺跡・姉崎宮山遺跡・姉崎上野合遺跡・姉崎山新遺跡・姉崎妙経寺遺跡・椎津茶ノ木遺跡・椎津五霊台遺跡・椎津中台遺跡・畑木小谷遺跡・片又木遺跡などが調査され、低地から台地上に至る縄文時代から中世にかけての姉崎地区の様相が次第に明らかになりつつある^(註3)。これらのことから、姉崎地区もまたひとつの文化の中心地であることが立証されてくるのである。

註1 ここでのちはら台遺跡群の名称は、草刈遺跡・草刈六之台遺跡・川焼台遺跡の他、ちはら台ニュータウン造成工事に伴う広範囲にわたる村田川北岸遺跡の総称として使用している。なお、村田川の中・下流域の古墳について、狭義の説明を加えれば、村田川南岸地域における古墳群でも、西側に展開する大厩浅間様古墳・新皇塚古墳など時期の古い古墳から古墳群を形成する大厩・菊間地域と、6世紀末葉～7世紀初頭に比定され、下総型円筒埴輪列を持つ小谷1号墳(前方後円墳40m強)・埴輪を持たない最終段階の前方後円墳の可能性が非常に高い潤井戸杉山古墳(前方後円墳56.5m)などを主体とする東側の潤井戸地域に比較的新しい段階の大型古墳が集中しているのが現状であり、両者は地点を大きく変えて存在している。なお、和泉式期の豪族居館に比定される西山・草刈尾梨遺跡は大厩浅間様古墳と潤井戸杉山古墳のちょうど中間点に存在している。

対岸における草刈古墳群中では、草刈1・3号墳がともに35m前後の円墳であり、他に40m級の前方後円墳として32・33号墳や椎名崎古墳群中に人形塚古墳などが認められるが、いずれも南岸の大型古墳に比べやや規模が劣っていると云えよう。なお、菊間国造とその古墳群についての文献として以下の文献を参考とした。

沼沢 豊 「2 千葉」『古墳時代の研究』9 雄山閣出版1990

註2 狭義の姉崎古墳群の範囲は、低地に存在する姉崎二子塚古墳から台地上の最奥部の六孫王原古墳までを中心とするものであるが、ここでは今富塚山古墳や古墳改変の塚と捉えられる海保大塚(径60m円墳?現状は六角形の塚)・海保3号墳(径30m円墳・椎津稻荷山古墳(径40m強円墳)・外郭古墳(全長85m前方後円墳。椎津城築城により大半は削平か。周囲より埴輪が表採される。)などの大型古墳が存在する養老川下流域南岸範囲で捉えている。なお、狭義の姉崎古墳群についてや、上海上・菊間国造については以下の文献を参考とした。

沼沢 豊 「姉崎古墳群主要古墳一覧」『古墳時代研究Ⅱ』古墳時代研究会1975

甘粕 健 「養老川の古墳の分布と山王山古墳の歴史的 성격」『上総山王山古墳』市原市教育委員会1980

前之園亮一「関東国造の性格と諸類型」『市原地方史研究』13 1984

「房総の国造と中総首長連合」『千葉県の歴史』28 1984

「上海と下海上」『市原地方史研究』17 1992

「菊間国造について」『歴史散歩資料 市原市菊間周辺の遺跡と文化財』市原市地方史研究連絡協議会2001

註3 姉崎神社や狭義の姉崎古墳群の主流が存在する台地上に存在し、重複率が激しく詳細不明な宮山遺跡を除いた毛尻・六孫王原・原・東原の各遺跡は、いずれも弥生後期の竪穴式住居跡を主体とする。その後の古墳時代前期以降は遺構数を激減させ、中期前半の和泉式期には非常に不安定な状態を経ながらも、概ね中期後半の鬼高式初頭(TK-208型式段階)まで集落を存続させる。しかし、その後の摸倣坏出現段階以降には、これまで調査が実施された遺跡範囲からは、ほとんどその存在を認めることができない。このことは、東に大きく地点を隔てた台地上の畑木小谷遺跡でも同様の遺構分布を示している。

椎津川を挟んだ対岸の椎津台地に所在する椎津五霊台遺跡は、概ね姉崎神社の位置する台地上の遺跡と同様の変遷を遂げる。しかし、舌状台地先端部の椎津茶ノ木遺跡では、中期前半の和泉式の終末段階から継続的な集落を営み、鬼高式の古い段階から摸倣坏が盛行し衰退するまでの間、当域の他の遺跡から人間が移動してきたのではないかと思われるほど爆発的に竪穴式住居跡数が増加し、かつ、近接時期の遺構の重複を見る。そして、7世紀末葉から8世紀初頭段階に遺構数が激減する傾向が認められる。更に谷を隔て袖ヶ浦市と接する椎津中台遺跡は、茶ノ木遺跡で遺構数が激減した奈良・平安時代の集落跡である。

第1表関連文献等

- 1 永沼律朗 「市原市菊間古墳群」『千葉県重要古墳群測量調査報告書』千葉県教育委員会1995
- 2 高橋康男 「菊間深道遺跡」『平成5年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会1994
- 田所 真 「菊間深道遺跡B地点」『平成6年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会1995
- 3 鈴木英啓 『潤井戸西山遺跡』(財)市原市文化財センター調査報告書第9集1986
- 半田堅三 『草刈尾梨遺跡』(財)市原市文化財センター調査報告書第46集1986
- 4 小橋健司 「姉崎山新遺跡(第2地点)」『平成11年度市原市文化財センター年報』(財)市原市文化財センター1999
- 小橋健司 「姉崎塚塚遺跡(2次)」『平成9年度市原市文化財センター年報』(財)市原市文化財センター1997
- 5 斉木 勝ほか 「新皇塚古墳」「菊間遺跡」『市原市菊間遺跡』(財)千葉県都市公社1974
- 6 近藤 敏 『市原市菊間手永遺跡』(財)市原市文化財センター調査報告書第23集1987
- 7 須田 勉 「古代地方豪族と造寺活動」『古代探叢』早稲田大学出版部1981
- 「菊間廃寺」『千葉県の歴史資料編考古3 奈良・平安時代』千葉県1998
- 8 浅利幸一 『市原市大厩浅間様古墳調査報告書』(財)市原市文化財センター調査報告書第42集1999
- 9 三森俊彦ほか 『市原市大厩遺跡』(財)千葉県都市公社1974
- 10 萩原恭一 「市原市潤井戸杉山古墳測量調査報告」『千葉県史研究第10号』千葉県2002
- 11 市原市教育委員会 『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図—北部編—改訂版』1998
- 12 祭り野遺跡・山王後古墳調査団 『祭り野遺跡・山王後1号墳』祭り野遺跡・山王後古墳調査団1982
- 13 高橋康男 『市原市小谷1号墳』(財)市原市文化財センター調査報告書第45集1992
- 14 木對和紀 「潤井戸上横峰遺跡」『平成元年度市原市内遺跡群発掘調査報告』市原市教育委員会1989
- 15 田所 真 「潤井戸鎌之助遺跡」『平成10年度第14回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』(財)市原市文化財センター1998
- 16 白井久美子ほか 「草刈六之台遺跡」『千原台ニュータウンVI』(財)千葉県文化財センター調査報告書第241集1994
- 17 田井知二 「草刈1号墳」『千原台ニュータウン7』(財)千葉県文化財センター調査報告書第295集1997

- 18 永沼律朗 『市原市今富塚山古墳確認調査報告書』(財)千葉県文化財センター調査報告書第221集1991
- 19 千葉県教育庁文化課「姉崎天神山古墳」『千葉県記念物実態調査報告書』I 1980
千葉県教育委員会「市原市姉崎古墳群」『千葉県重要古墳群測量調査報告書』千葉県教育委員会1994
- 20 小久貫隆史 『市原市釈迦山古墳発掘調査報告書』千葉県教育委員会1995
千葉県教育委員会「市原市姉崎古墳群」『千葉県重要古墳群測量調査報告書』千葉県教育委員会1994
- 21 大場磐雄ほか「上総国姉崎二子塚発掘調査概報」『考古学雑誌』37-3 日本考古学会1952
杉山晋作 「あらたに発見された姉崎二子塚古墳の鏡」『史館』4号1974
千葉県教育委員会「二子塚古墳」『千葉県記念物実態調査報告書』II 1980
千葉県教育委員会「市原市姉崎古墳群」『千葉県重要古墳群測量調査報告書』千葉県教育委員会1994
- 22 上総山王山古墳発掘調査団『上総山王山古墳』市原市教育委員会1980
- 23 姉崎鶴窪古墳調査団『鶴窪古墳』市原市教育委員会2002
千葉県教育委員会「市原市姉崎古墳群」『千葉県重要古墳群測量調査報告書』千葉県教育委員会1994
- 24 石井則孝ほか『千葉県市原市姉ヶ崎原一号墳発掘調査概報』千葉県教育委員会1971
- 25 中村恵次ほか「前方後墳の一考察」『古代』第55号早稲田大学考古学会1973
中村恵次ほか『古墳時代の研究Ⅱ—市原市六孫王原古墳の調査—』古墳時代研究会1975
千葉県教育委員会「市原市姉崎古墳群」『千葉県重要古墳群測量調査報告書』千葉県教育委員会1994
- 26 毛尻遺跡調査会『千葉県市原市毛尻遺跡発掘調査報告書』毛尻遺跡調査会1983
半田堅三 『市原市姉崎六孫王原遺跡』(財)市原市文化財センター調査報告書第58集1997
- 27 大村 直 『市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡』(財)市原市文化財センター調査報告書第40集1991
- 28 高橋康男 『市原市姉崎東原遺跡』(財)市原市文化財センター調査報告書第37集1990
『市原市姉崎東原遺跡B地点』(財)市原市文化財センター調査報告書第51集1993
- 29 木對和紀 「姉崎上野台遺跡」『平成元年度市原市内遺跡群発掘調査報告』市原市教育委員会1989
- 30 田中清美 「姉崎妙経寺遺跡」『平成10年度第14回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』(財)市原市文化財センター1998
- 31 木對和紀 『市原市椎津茶ノ木遺跡』(財)市原市文化財センター調査報告書第49集1992
鶴岡英一 「椎津茶ノ木遺跡」『市原市畑木小谷遺跡・椎津茶ノ木遺跡(第2次)』(財)市原市文化財センター調査報告書第73集2000
- 32 高橋康男 『市原市五霊台遺跡』(財)市原市文化財センター調査報告書第64集1998
- 33 高橋康男 「椎津中台遺跡」『平成10年度第14回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』(財)市原市文化財センター1998
- 34 北見一弘 「畑木小谷遺跡」『平成10年度市原市内発掘調査報告』1999市原市教育委員会
「市原市畑木小谷遺跡・椎津茶ノ木遺跡(第2次)」『不特定遺跡発掘調査報告(3)』市原市教育委員会2000
- 35 杉山晋作ほか「海保大塚の測量調査」『関東地方における終末期古墳の研究』国立歴史民俗博物館1990
- 36 中村恵次ほか「海保古墳群」『市原市埋蔵文化財調査報告書』4市原市教育委員会1968

第2章 1 姉崎山新遺跡

遺跡の位置

姉崎地区の低地部の調査は、姉崎駅前土地区画整理事業や都市計画道路八幡椎津線建設工事に伴い本格化され、姉崎妙経寺遺跡では多数の古墳群と縄文中期の貝塚などが、姉崎棗塚遺跡では中世土壌墓群と共に多くの人骨などが、姉崎山新遺跡（明神小学校グラウンド内）では縄文時代晩期の包含層と共に弥生時代中期の遺構などが検出されている。今回調査を実施した姉崎山新遺跡は、都市計画道路椎津姉崎線で調査が実施された姉崎棗塚遺跡と姉崎山新遺跡が接する地点の南側約100m、標高5～6m前後の沖積地で、遺跡の縁辺部に位置する。

調査概要

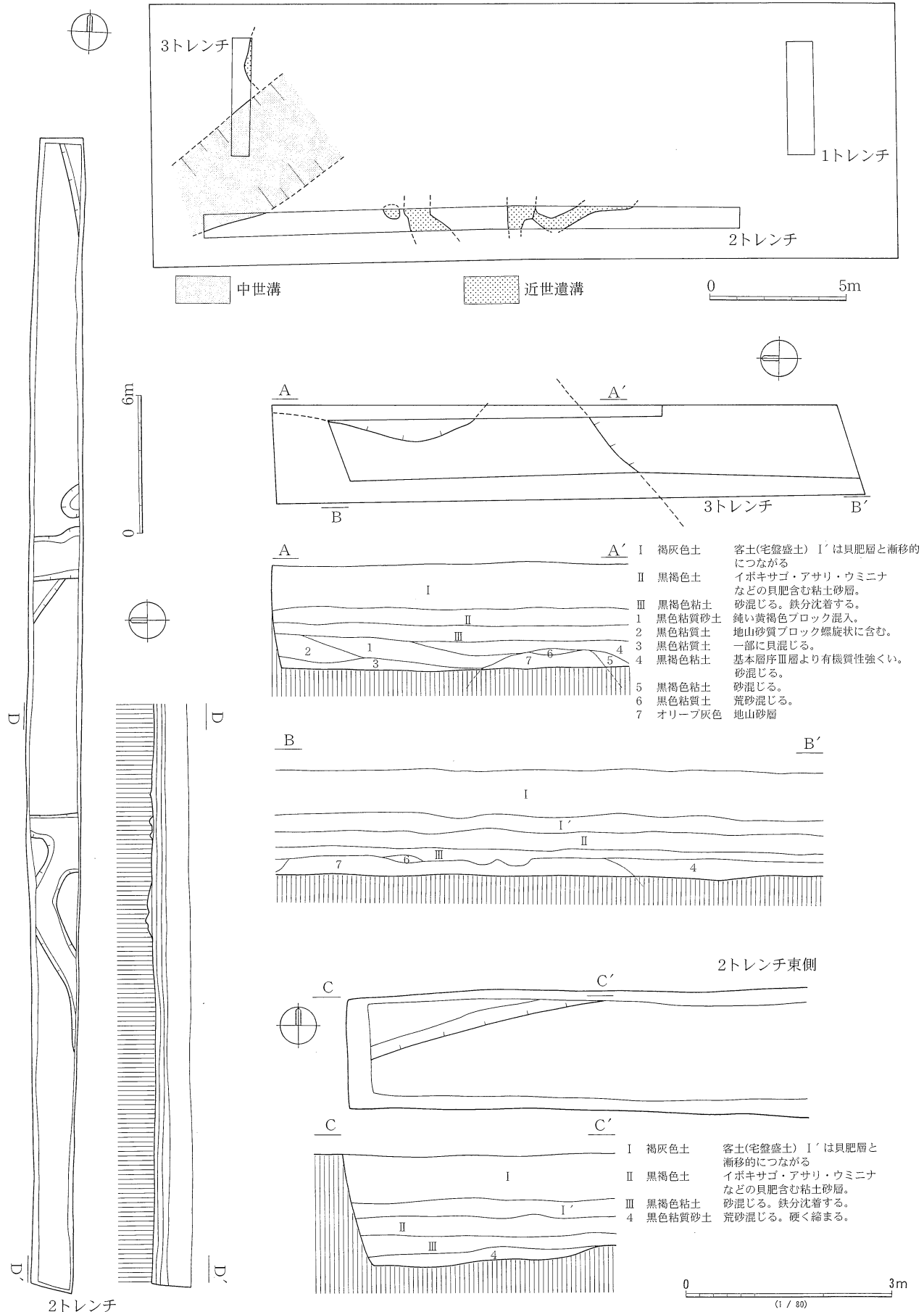
遺跡の立地上、建物基礎部分にはトレンチを入れない方針のもと、調査区の3箇所トレンチを設定して調査を開始した。第1トレンチからは何の遺構も検出することができなかったが、第2・第3トレンチに跨って中世遺構と捉えられる溝1条を検出した。他の遺構については、正確な帰属時期を捉える事ができなかったが、周囲の遺物出土状況や覆土の堆積状態などから、おそらく近世以降に下る遺構である可能性が高い。

遺構と遺物

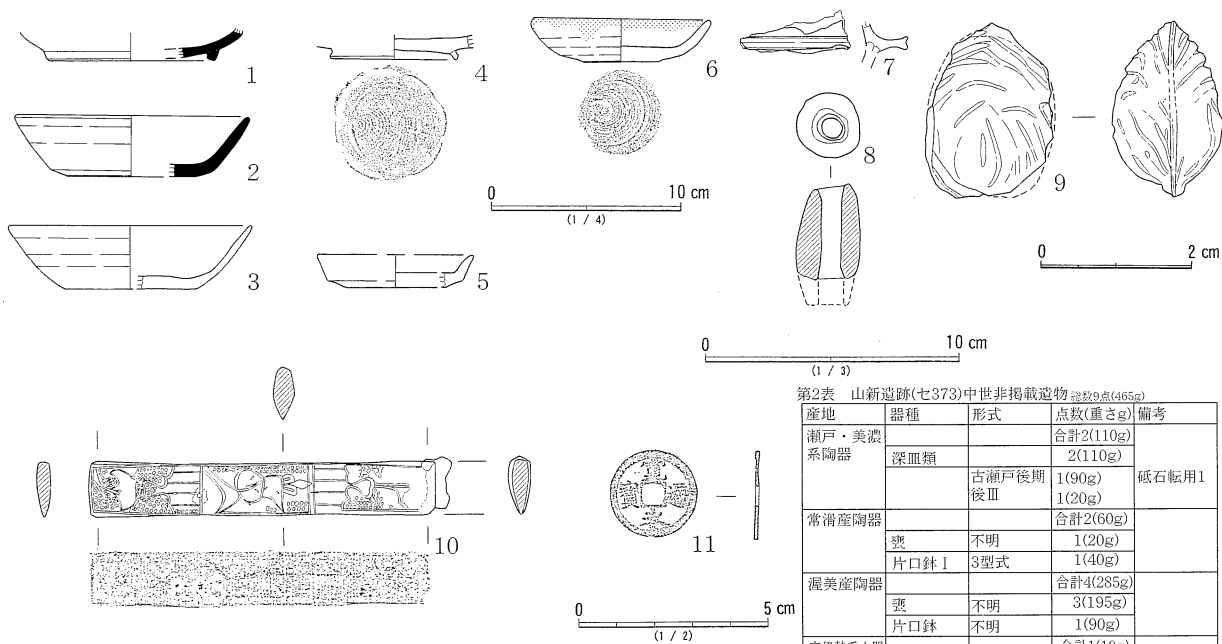
今回の調査区域から総数462点、6,047.9gの遺物を検出した。内訳は縄文土器5点、土師器384点、須恵器20点、カワラケ・中世陶器12点、寛永通宝1点、小柄1点などである。遺物は平安時代の土師器片が最も多く、次いで須恵器片、中世陶器類などが認められるが、細片が多く、図示に至る遺物は少ない。この内11点を図示した。6は3トレンチから出土した瀬戸・美濃系の縁軸小皿である。10は1トレンチから検出された打刀拵の真鍮製小柄である。刃部を欠くが、外面片側に十二支に関連すると思われる鼠の線刻が施されている。11は2トレンチから検出された寛永通宝である。



第3図 姉崎山新遺跡調査地点（1：5,000）



第4図 姉崎山新遺跡遺構配置図(1:200)・遺構実測図



第2表 山新遺跡(セ373)中世非掲載遺物 総数9点(465g)

産地	器種	形式	点数(重さg)	備考
瀬戸・美濃系陶器	深皿類		合計2(110g)	砥石転用1
		古瀬戸後期後Ⅲ	1(90g) 1(20g)	
	常滑産陶器		合計2(60g)	
	甕	不明	1(20g)	
	片口鉢Ⅰ	3型式	1(40g)	
瀬美産陶器			合計4(285g)	
	甕	不明	3(195g)	
	片口鉢	不明	1(90g)	
南伊勢系土器			合計1(10g)	
	羽釜		1(10g)	

第5図 姉崎山新遺跡遺物実測図

2 潤井戸遺跡群下宿地区

遺跡の位置

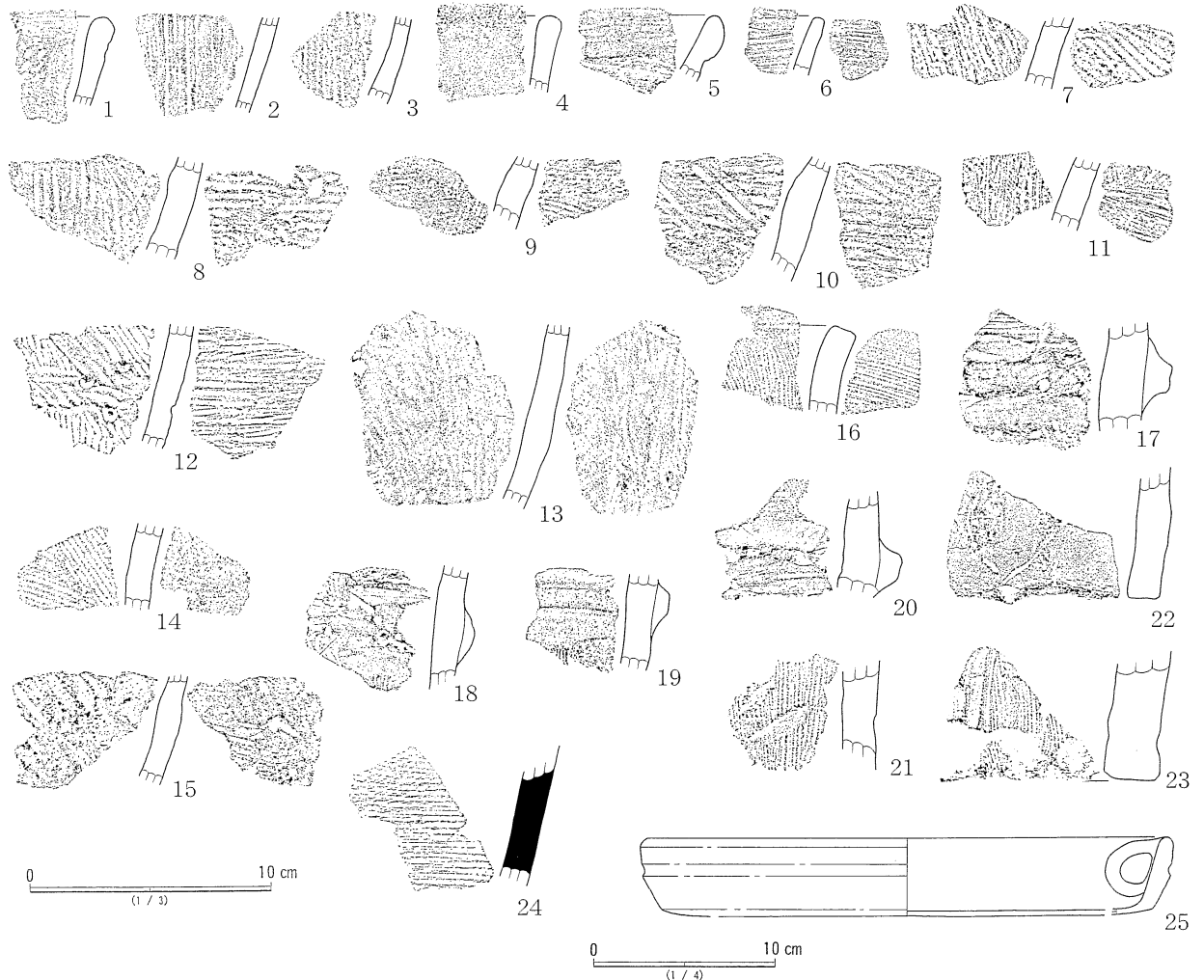
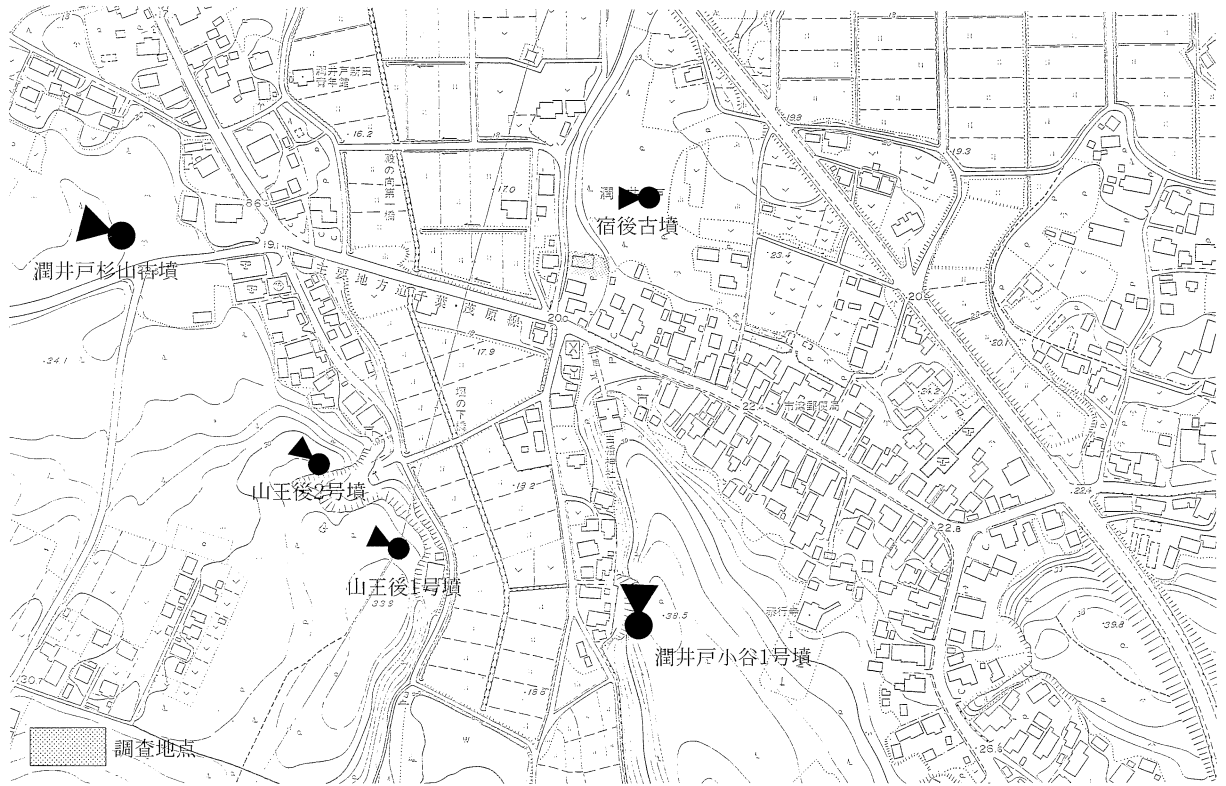
今回の調査地点は、村田川中流域南岸において、中規模の前方後円墳が比較的集中する地域内に位置し、全長35mの前方後円墳である宿後古墳の南に隣接した標高20m前後の台地上に位置する。周辺には潤井戸小谷1号墳や山王後古墳などの調査が実施された前方後円墳が存在し、また、測量調査ながら潤井戸杉山古墳も存在している。これら周囲の中規模前方後円墳の調査状況から、当域の中規模古墳の築造時期は前方後円墳の終末とされる6世紀末葉から7世紀初頭に集中しており、前期古墳から築造を開始する菊間古墳群とは異彩を放つ。これがこの時期当域に台頭してきた新興勢力か、或はこの時期勢力を当域まで拡張してきた菊間国造の影響下にあったかどうかは不明ながら、当域では終末期古墳の開始期中規模前方後円墳が集中的に築造されていることが興味深い。

調査概要

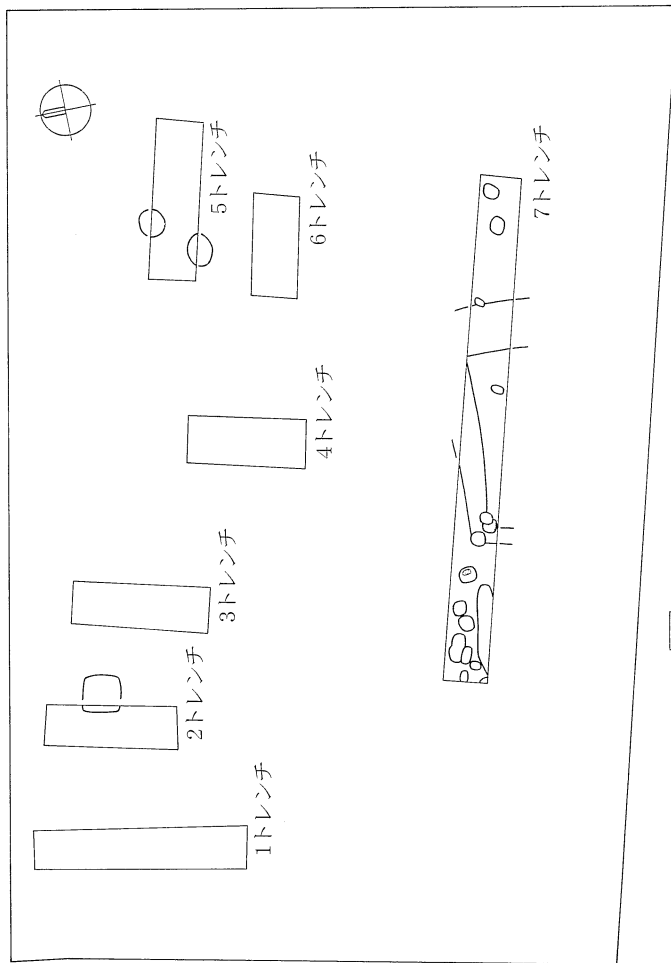
現状の調査区内は、過去の宅盤工事の客土によって平坦であるが、旧地形は北から南東に向って緩やかな斜面を形成していたことが7トレンチの調査によって判明している。隣接する宿後古墳が所在する台地より既に1m前後削平されており、調査区全域に設定した7箇所のトレンチ調査から、遺構密度は低い傾向が認められた。

遺構と遺物

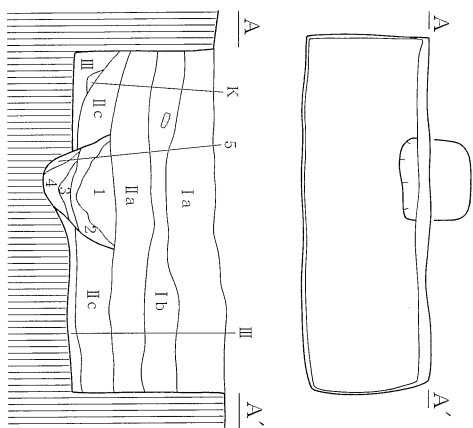
今回の調査区域から総数225点4,248gの遺物を検出し、内24点を図示した。内訳は早期撚糸文系土器6点、早期条痕文系土器62点、土師器63点、須恵器1点、埴輪片30点、焙烙1点などである。埴輪、早期条痕文系土器片が目につくが、遺跡全体の遺物出土量は少ない。調査区全体では、縄文時代早期と古墳時代後期の遺物が主体を占めており、遺跡の帰属する時期も当期を主体とするものと考えられる。ただし円筒埴輪片については、調査区内に同時期の遺構が存在しないため、調査区北側に隣接する宿後古墳に帰属する可能性が高い。



第6図 潤井戸遺跡群下宿地区調査地点位置図 (1:5,000) ・遺物実測図



■ 焼土



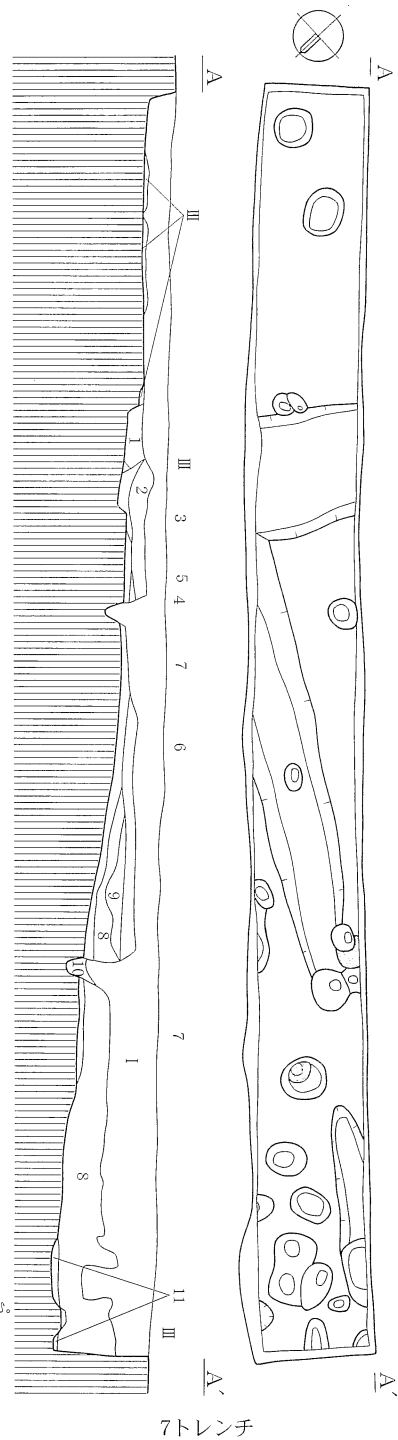
■ 宝永火山灰

- Ia 暗褐色土 客土。砂・ローム粒ロームブロック様に含む。
- Ib 暗褐色土 Ia層より有機質性強い。ローム粒含む。砂っぽい。
- IIa 暗褐色土 有機質土。混入物少ない。
- IIc 暗褐色土 有機質土。ローム粒僅かに含む。
- III 黄褐色土 ソフトローム。

- I 暗褐色土 客土。砂・ローム粒ロームブロック様に含む。
- III 黄褐色土 ハードローム
- 1 暗褐色土 ローム粒多く含む。ロームブロック少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック含む。
- 3 黒褐色土 ロームブロック含む。やや縮まり無し。やや黒味強い。
- 4 暗褐色土 ロームブロック炭化物含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロック含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒疎らに含む。
- 7 暗褐色土 ソフトローム崩壊土含む。
- 8 黒褐色土 有機質土。IIc層相当か？
- 9 暗褐色土 新規テフラ？
- 10 暗褐色土 ロームブロック含む。縮まり無し。
- 11 褐色土 ロームブロックやや多く含む。



0 3m (1/80)



第7図 潤井戸遺跡群下宿地区遺構配置図(1:200)・遺構実測図

1・3～5トレンチからは何の遺構も検出されなかった。2トレンチからは、第4層を掘り込む推定方形プランの土坑が検出された。2トレンチの第2層からブロック状の宝永火山灰が検出されており、このことは第2層の形成期が、西暦1707年を含む範疇で捉える事が可能である。第3層の間層を挟むことから、比較的古い段階の遺構であろうと想定される。6トレンチからはシミ状の円形プランが2個所に検出されたが、掘り込みも浅く、覆土の堆積状況から遺構である可能性は極めて低い。7トレンチからは平面的に方形に捉えられる溝と、多数のピットが検出された。ピットの2箇所からは焼土が検出されたが、時期を確定できる資料に恵まれなかった。また、平面的が方形に巡る溝については、調査担当者の見解では比較的新しい段階の別々の溝とのことであり、所謂奈良・平安時代の方墳に連続する方形周溝ではない。

3 潤井戸西山（草刈尾梨）遺跡

遺跡の位置

市原市埋蔵文化財分布地図上での潤井戸西山遺跡は、昭和59年度（1985）と平成2年度（1991）に調査が実施されており、1986年度には潤井戸西山遺跡、1992年度は草刈尾梨遺跡として報告書が刊行されている。今回調査区の発掘届に始まる一連の事務処理上での遺跡名は、市原市埋蔵文化財分布地図上での潤井戸西山遺跡ではなく、草刈尾梨遺跡として提出されているが、分布地図上での周知遺跡としての遺跡名は潤井戸西山遺跡が正しい。よってここでは潤井戸西山（草刈尾梨）遺跡として報告していく。

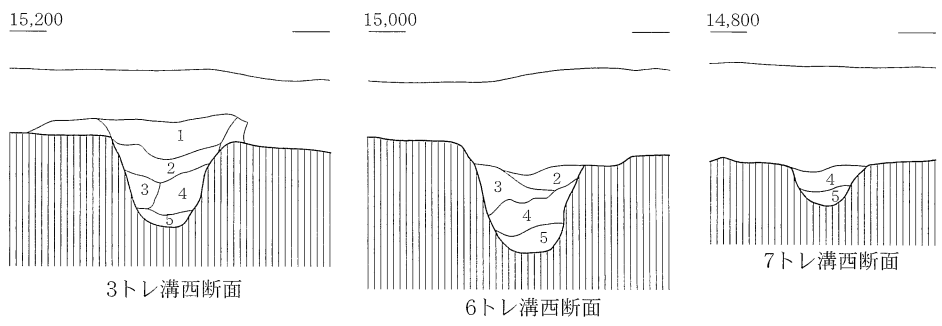
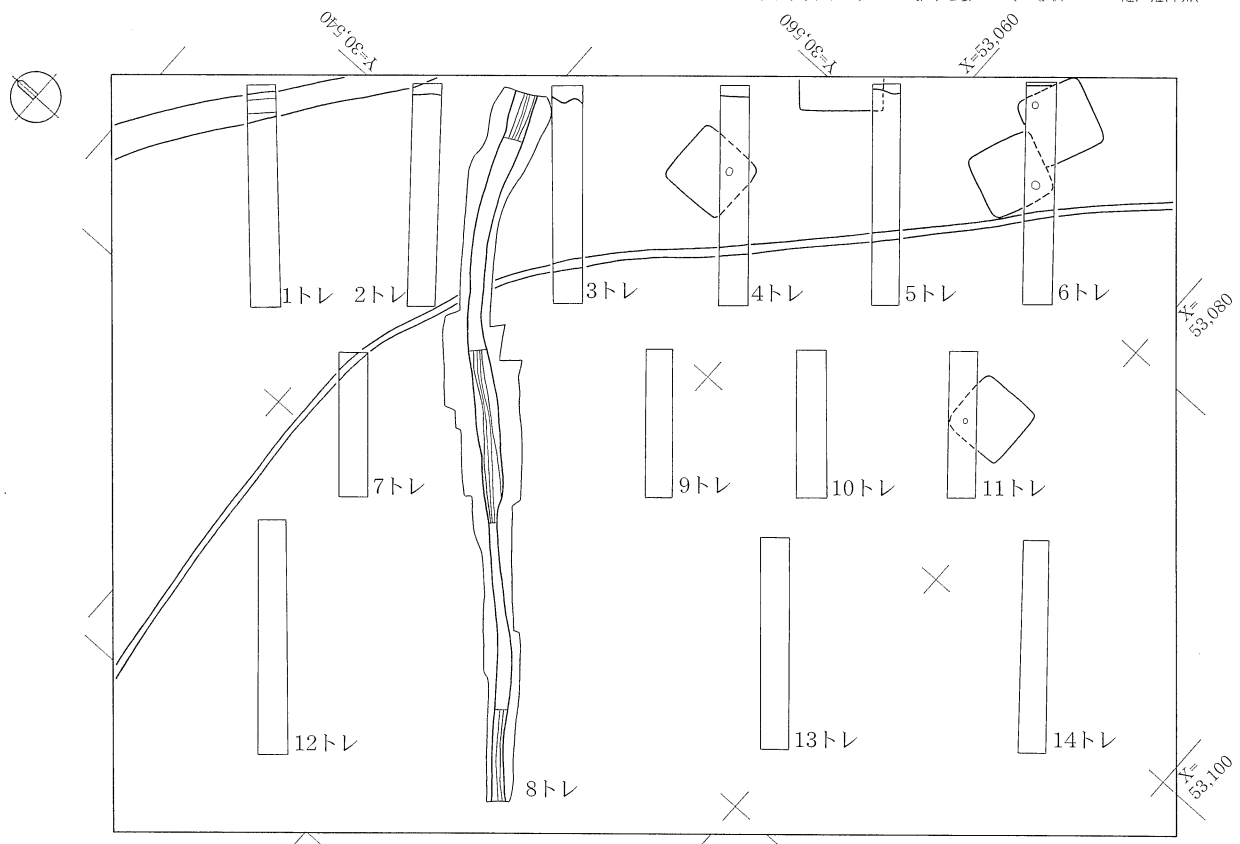
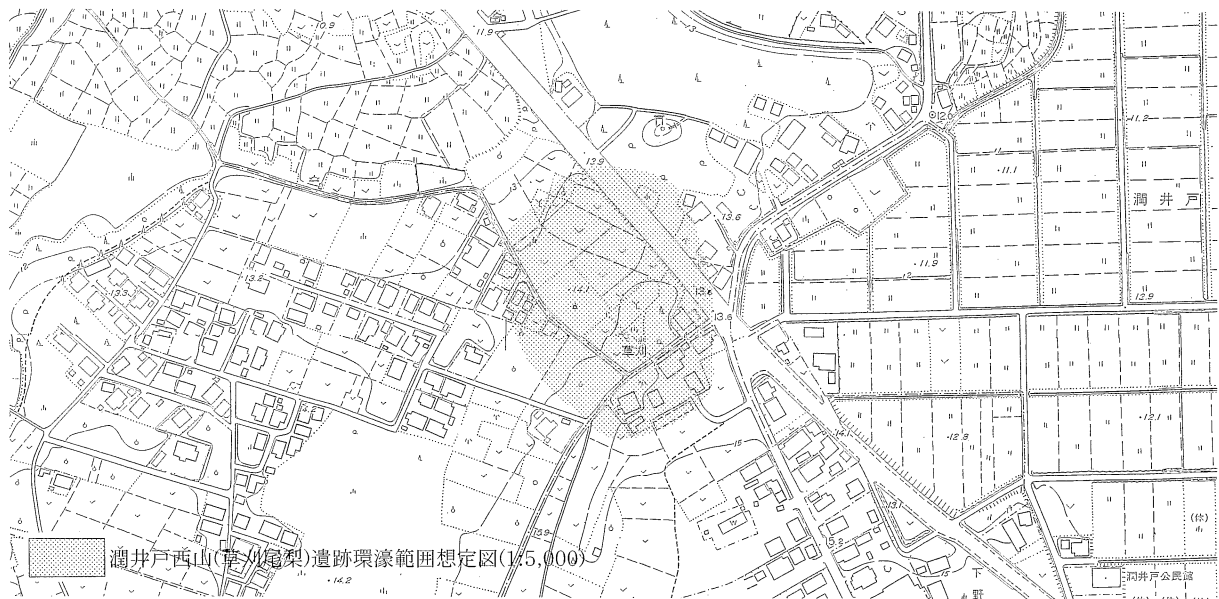
今回の調査区は、平成2年度に調査が実施された草刈尾梨遺跡の北方約50m離れた地点に存在する。過去2度の調査によって、遺跡は弥生時代の環濠集落、また古墳時代中期には、四脚門と柵列により東西70m南北100m前後に区画された掘建柱建物群と鍛冶工房からなる豪族居館跡として注目を浴びることになった。この豪族居館跡の位置は、古墳時代前期からの変遷がたどれる菊岡古墳群と、終末期の前方後円墳を主体とする潤井戸小谷1号墳周辺地域のほぼ中間地点に存在している。

調査概要

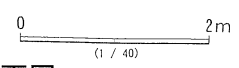
調査区内の14箇所に入れたトレンチを調査した。遺跡は調査直前の徹底した破壊活動によって壊滅的な状態であり、掘り込みの深い遺構以外は大幅な削平を受け残存していなかった。したがって、検出された遺構・遺物量は限定されており、かつ、古墳時代中期の豪族居館と関連する積極的な資料は得ることができなかった。しかしながら、西山遺跡で検出された断面V字形の弥生環濠や、草刈尾梨遺跡で検出された古墳後期の断面逆台形溝に連続すると思われる溝を検出し、少なくとも西山遺跡で検出された弥生環濠集落の概ねの面積を把握することができた意義は大きい。

遺構と遺物

今回の調査区域から総数563点、6,851.5gの遺物を検出し、内31点を図示した。遺物は遺構が残存した弥生環濠内でも掘り込みの深い個所から比較的まとまった状況で検出され、復元に耐えうる資料が検出されている。辛うじて削平を免れた感があり、削平率の高さからすれば概ねの時期を示す資料にも恵まれたことは不幸中の幸いである。1は弥生環濠として、調査区内でその方向性と規模を把握するために拡張した8トレンチ中央部の遺物集中出土地点から検出された宮ノ台式期の壺である。2は甕である。これらの遺物を検出した8トレンチ検出の断面V字形の弥生環濠は、その規模と形状よ



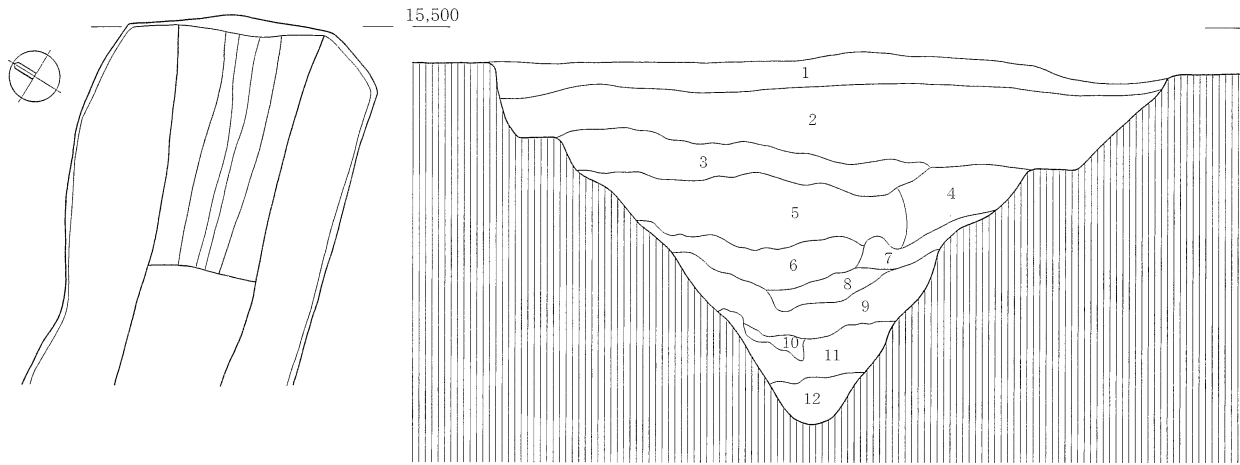
- 1 黒色土 有機質土中にローム粒炭化物若干含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒含む。
- 3 黒色土 黒褐色土+0.5~1cm大のロームブロック
- 4 暗褐色土 暗褐色土+1~2cm大のロームブロック
- 5 黒色土 ローム粒少量含む。



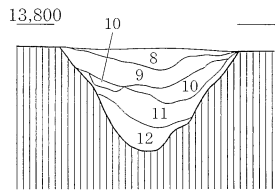
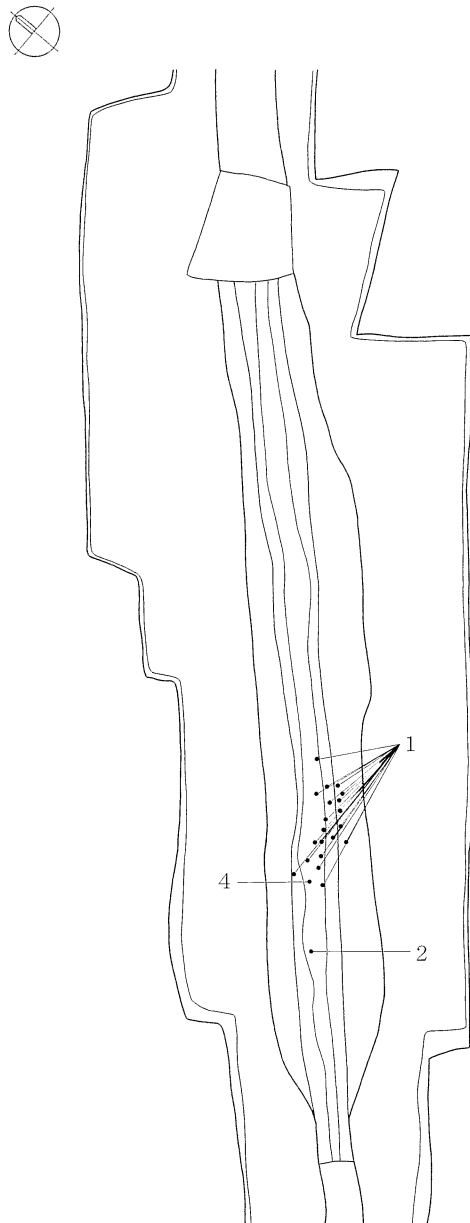
第8図 潤井戸西山(草刈尾梨)遺跡位置・遺構配置・土層断面図



第9図 潤井戸西山遺跡環濠想定図 (1:1,000) ・遺構配置図



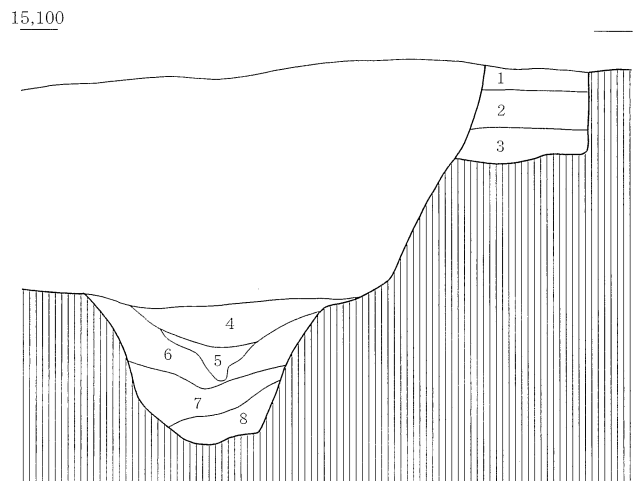
8トレ北側土層断面



8トレ南側土層断面

- | | |
|---------|--------------------------|
| 1 黒褐色土 | 現表土 |
| 2 黒褐色土 | 有機質土中にローム粒、焼土粒僅かに散る。 |
| 3 暗褐色土 | 黒褐色土+少量の暗褐色土 |
| 4 暗褐色土 | 1cm大のロームブロック含む。やや縮まり無し。 |
| 5 暗褐色土 | 黒褐色土+0.5~1cm大のロームブロック |
| 6 暗褐色土 | 黒褐色土+ローム粒 |
| 7 暗褐色土 | 1cm大のロームブロック含む。やや縮まり無し。 |
| 8 黒褐色土 | 有機質土中に+1cm大のロームブロック若干含む。 |
| 9 暗褐色土 | 黒褐色土+1~2cm大のロームブロック |
| 10 黒褐色土 | 有機質土。縮まり弱い。 |
| 11 暗褐色土 | 暗褐色土+1~5cm大のロームブロック多量。 |
| 12 暗褐色土 | 粘性暗褐色土+1~5cm大のロームブロック多量。 |

0 2m
(1 / 40)

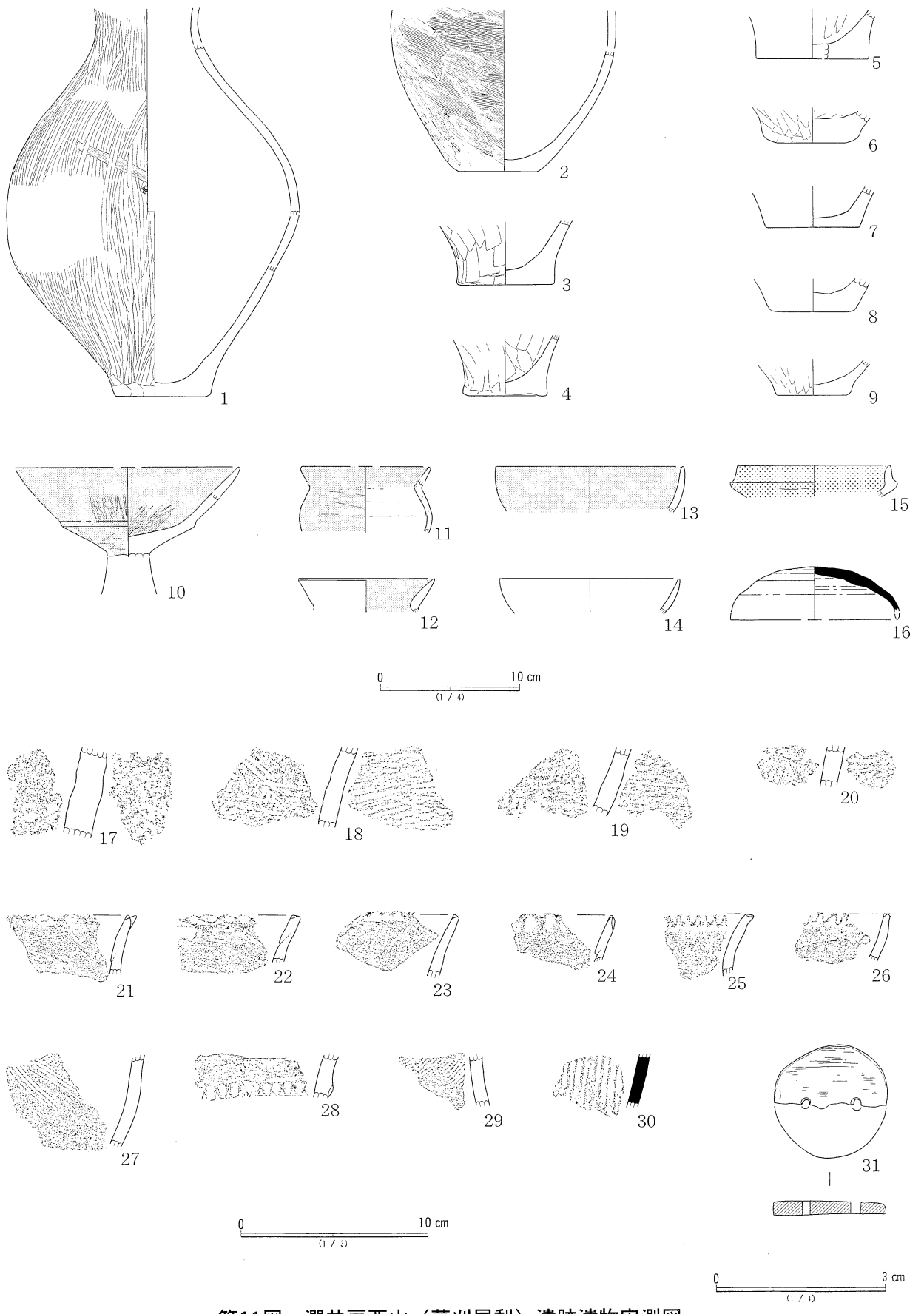


1トレ西側土層断面

- | | |
|--------|---------------------------|
| 1 現表土 | |
| 2 黒褐色土 | ローム粒若干含む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒含む。 |
| 4 黒色土 | 極めて有機質性強。ローム粒若干含む。 |
| 5 黒色土 | 有機質土中に1cm大のロームブロック若干含む。 |
| 6 暗褐色土 | 黒褐色土+0.5~1cm大のロームブロック |
| 7 暗褐色土 | 暗褐色土+1~2cm大のロームブロック均等。 |
| 8 暗褐色土 | 暗褐色土+5~8cm大のロームブロック多量に含む。 |

0 3m
(1 / 80)

第10図 潤井戸西山(草刈尾梨)遺跡遺構実測図



第11図 潤井戸西山（草刈尾梨）遺跡遺物実測図

り昭和59年度調査地点の西山遺跡検出の弥生環濠に継続するものと思われる。また、地形的な制約等でも検討を加えるため、2,500分の1の地形図にその範囲を投影した。その結果、環濠集落の存在する標高は概ね14m以上の台地上と考えられるため、西南方面にはまだ拡張できる余地があるが、北東方向には拡張する余地が少なく、特に東側については殆ど拡張が不可能なことが判明した。また、検出された環濠形状からしても、平面形が極端な凹凸を持つプランとは考えられないことから、東西に狭く南北にやや長い楕円形として復元することが妥当と考えられる。したがって、少なくとも第8・9図に示す範囲に初期弥生環濠集落の復元プランを求めることが可能である。復元範囲については多少の誤差が生じていることを承知で、その面積をプランメーターで測ると、およそ19,400㎡の規模となる。安藤氏によれば、東京湾西岸域における弥生環濠集落の規模は、20,000㎡が標準とされる^(註1)ので、西山遺跡の復元環濠集落も無難な範疇と言えるであろう。なお、1トレンチからも上部を削平されているが類似するV字溝が検出されており、後日に行われた本調査によって、本V字溝も弥生環濠である可能性が極めて高くなった。これらのことから、1トレンチから検出されたV字溝は、環濠集落の拡張に伴うV字溝である可能性が考えられる。

平成2年度調査の草刈尾梨遺跡で検出された溝状遺構に継続する溝と考えられる遺構が、3～7トレンチにかけて検出された。何れの上層も調査直前の徹底した破壊活動によって壊滅的な削平を受けていたが、ハードルーム層中に掘り込まれた遺構部分は奇跡的に残存しており、更に調査区域外に延びると想定される溝である。草刈尾梨遺跡では7世紀初頭前後の竪穴住居跡を削平して存在しており、古墳時代終末期以降の遺構であることが判明している。今回の調査区域中の覆土からも7世紀前半頃の坏型土器などがこの溝に伴って出土しており、草刈尾梨遺跡で削平した竪穴住居の直後に構築された溝である可能性が高い。

4 東関山古墳

遺跡の位置

菊間古墳群は、村田川下流域南岸の標高21m前後の台地先端部を占め、姫宮古墳などの前方後円墳を主体とする東側の一群と、谷を挟み径45m前後の菊間天神山古墳（円墳）を主体とする西側の一群とに大きく二分されて存在する。今回周溝の一部を調査した東関山古墳は、この前方後円墳を主体とする東側の一群中に存在し、大型古墳としては台地先端部から最も奥まった南側に位置する。

調査概要

今回の調査区は、現存する古墳の墳形や過去の周辺部の調査から、前方後円墳の括れ部付近と想定される個所に位置したが、諸般の制約により調査区内の3箇所にとレンチを設定して調査を開始した。

遺構は設定トレンチ全てから検出された。地下式壙や明らかに中世段階の遺物を含むものが多く、東関山古墳周溝と、2トレンチ検出溝を除いた全ての遺構は中世以降に帰属する可能性が極めて高い。

遺構と遺物

今回の調査区域から総数1,117点、9,817gの遺物を検出し、内45点を図示した。弥生土器・土師器・須恵器・中世土器・陶器などが検出されたが、東関山古墳の築造年代を決定する遺物を確定できない。ただし、カワラケ・中世陶器類は計24点検出され、中世段階の生活痕が垣間見られる。

1トレンチからは3条の溝が検出された。北側端部からは、検出位置やレベル的に見て、おそらく

東関山古墳の周溝本来の立上り部と想定される溝が検出された。これは、平成6年度の深道遺跡の調査によって、東関山古墳の後円部周溝と想定された幅10mの周溝幅から見ても妥当な位置からの検出である。これより南に1.2m離れた位置から、平行して走る溝が検出された。深道遺跡から検出された平行して走る溝と位置・幅的にも類似しており、これにより、東関山古墳の周溝は二重周溝である可能性が高くなってきた。1トレンチ内を南北方向に走る細い溝は、この溝に削平されて存在しており、時的にも新しい遺構と判断される。

2トレンチからは1条の溝が検出されている。南側は調査に先行する解体作業時に、浄化槽の抜き取り工事が行われており既に削平されている。市文化課立会い調査で捉えられた前方部北端部トレンチ内の東側溝に覆土も類似しており、溝幅と溝底検出レベル、その方向性がほぼ一致することから考えると、東関山古墳築造に先行する溝である可能性が極めて高い。

3トレンチからは中世遺物を検出する溝・地下式壙・東関山古墳本体の周溝が検出された。土層断面によれば、明らかに地下式壙が東関山古墳の周溝を削平して構築されており、周溝本来の立上り部は不明である。しかし、少なくとも地下式壙天井部落下土と想定される覆土最上層のハードローム落下土検出面までは、東関山古墳本来の周溝掘り込み範囲と捉える事が可能である。また南側の周溝立上り部のレベルは、1トレンチで検出された東関山古墳周溝本来の立上り部と想定される溝の確認面より40cm以上低く、さらにトレンチ内の中世遺物の出土状況や地下式壙などの存在から、中世段階に何らかの削平が行われた可能性が考えられる。ところで、今回検出された周溝の上端は、内外面とも直線的に近い。これに対して底面下端は、周溝内縁側が直線的なのに対し、周溝外縁側はかなり内側に内傾している。このことは少なくとも今回検出の周溝外縁部が、比較的括れ部に近い位置であることを物語っていると言えよう。

東関山古墳の復元

東関山古墳の規模については過去に何度か復元が試みられているが、正確な墳丘測量図を基に全長80m前後の前方後円墳に復元するのがこれまでの定説であつた^(註2)。しかし、確実な古墳周溝と断定できる調査範囲が、平成5年度の菊間深道遺跡^(註3)と極めて限定的であり、全長ならびに周溝形態の正確な復元に至るまでの資料に恵まれていなかったというのが実情であろう。

ところで、平成15年3月に調査された前方部前面部の調査によって、東関山古墳の周溝本体が検出されなかったことが逆に幸いし、東関山古墳の周溝本体の巡る位置がかなり限定的な範囲に絞られることになった。特に前方部の古墳周溝が巡る位置については、前方部前面の調査地点から市文化課の立会い調査実施地点の前方部北端トレンチ迄の範囲に限定されることになった。また、やや離れるが、推定周溝ラインに平行する溝が検出されており、二重周溝の可能性が俄に高くなってきた。

ここで今回の調査で得られた成果を纏めると、①外側周溝下端の掘り込み形態などから、極めて括れ部に近いこと。②本来の周溝幅は10m前後に復元できること。③菊間深道遺跡に認められた周溝の外縁に平行する溝が存在すること。が確実となってきた。そこで、これまでの調査成果に今回の調査成果を加え検討してみると、盾型周溝というよりは相似形周溝の二重周溝を保持する前方後円墳である可能性がさらに高くなってきたため、これまでの調査成果を基にした上で東関山古墳の復元を試みたのが第14図である。復元に際し、これまでの調査地点から得られた周溝幅約10mの調査結果を重視した。一定規模以上の前方後円墳の築造に際しては、地形上の問題を含めて無計画に築造されたものとは判

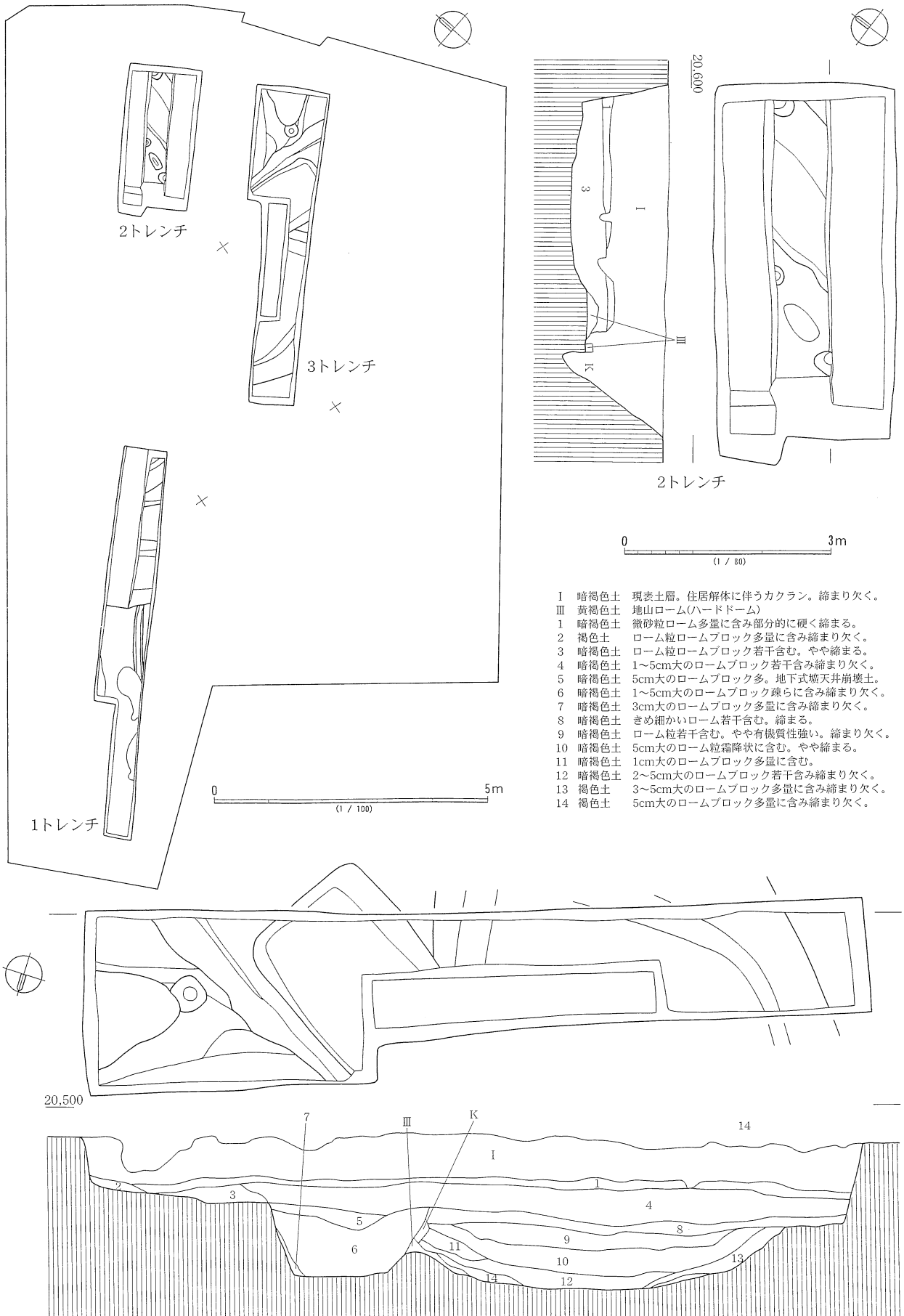


第3表 東関山古墳(セ384)中世非掲載遺物発掘6点(158g)

産地	器種	形式	点数(重さg)	備考
常滑産陶器			合計5(155g)	
	甕	不明	2(60g)	
	片口鉢Ⅱ	不明	3(95g)	地下式壙から1
貿易陶磁			合計1(3g)	
	白磁皿	D群	1(3g)	

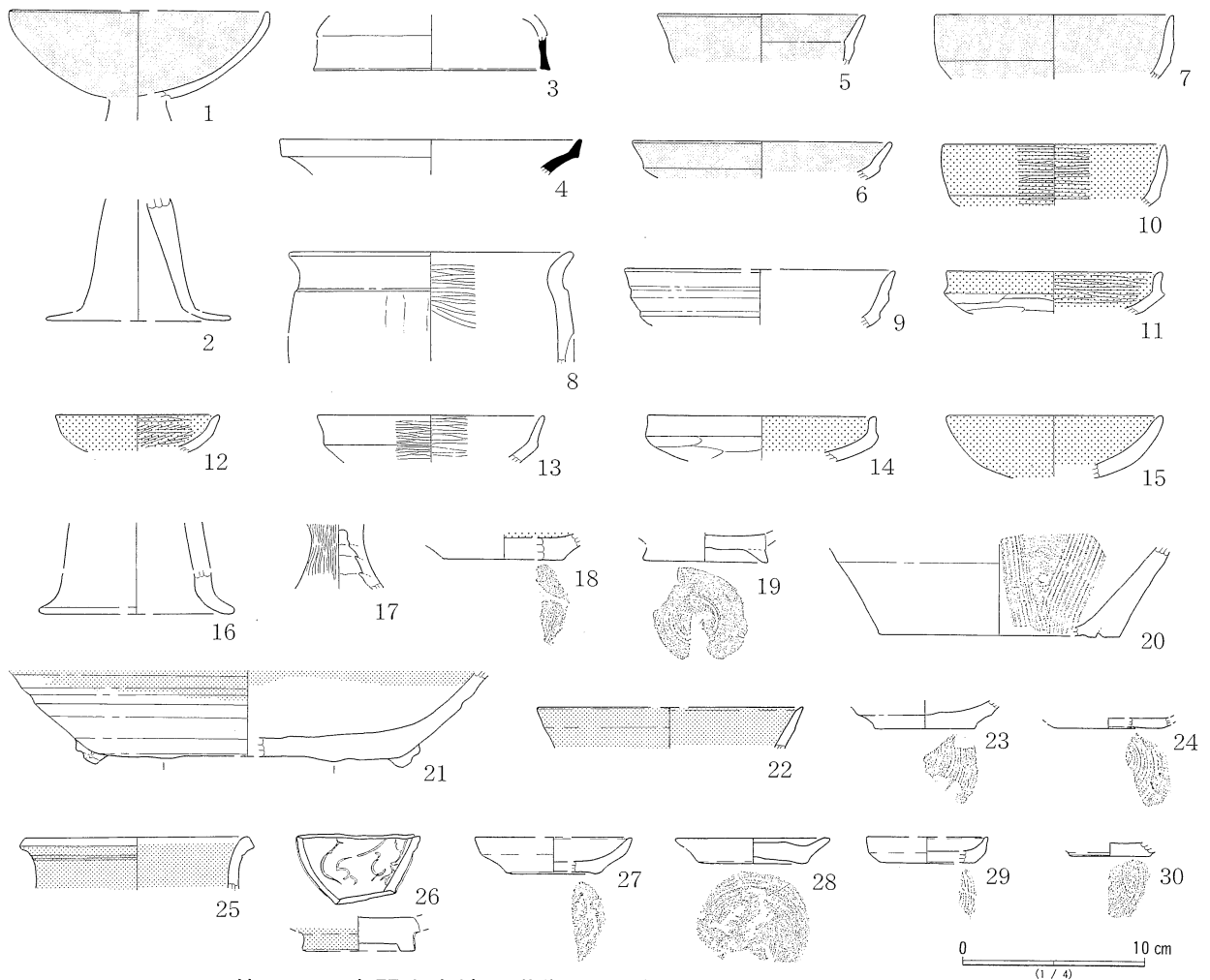
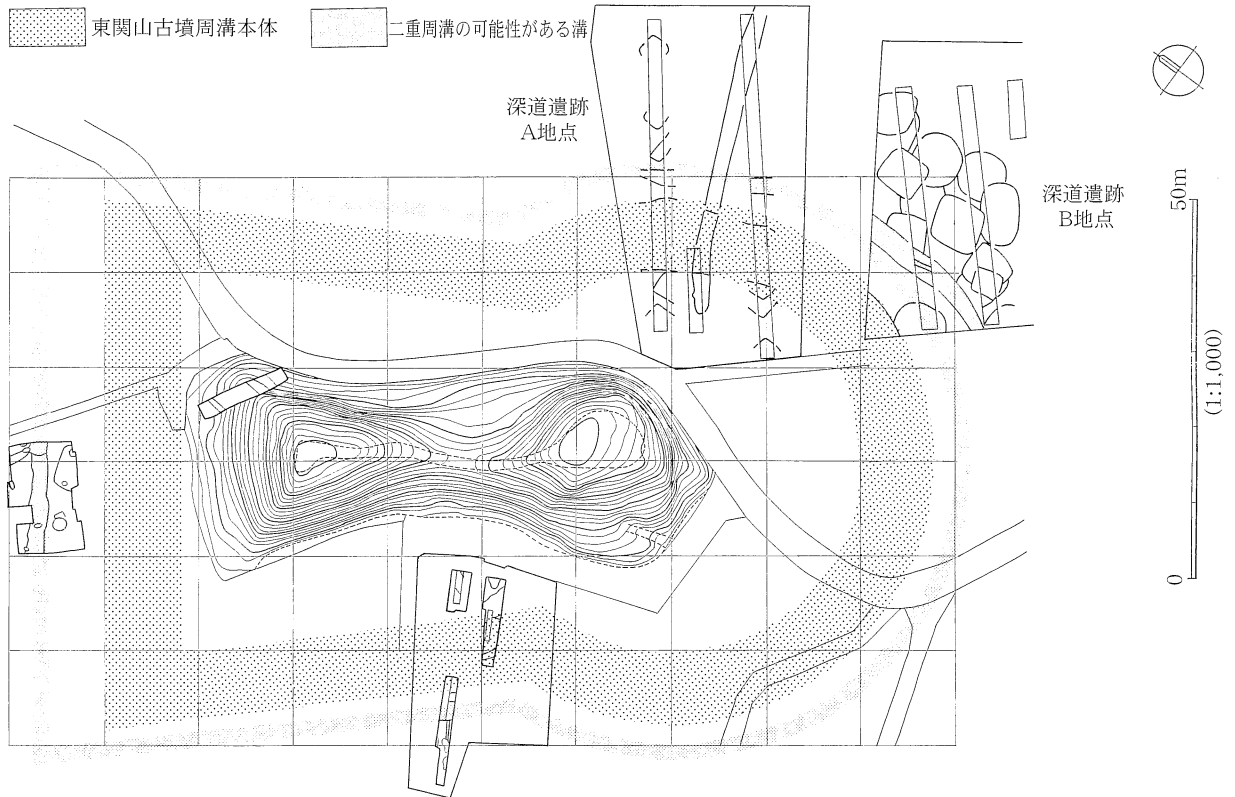
- I 暗褐色土 現実土層。締まり欠く。
- 1 暗褐色土 0.5~1cm大のロームブロックやや多く含み締まる。
- 2 暗褐色土 1層に似るが、ローム量多く締まり欠く。
- 3 暗褐色土 5cm大のロームブロック若干含み締まり欠く。
- 4 褐色土 5cm大のロームブロック多量に含む。
- 5 褐色土 地山ハードローム

第12図 東関山古墳調査地点位置図 (1:1,000) ・遺構実測図

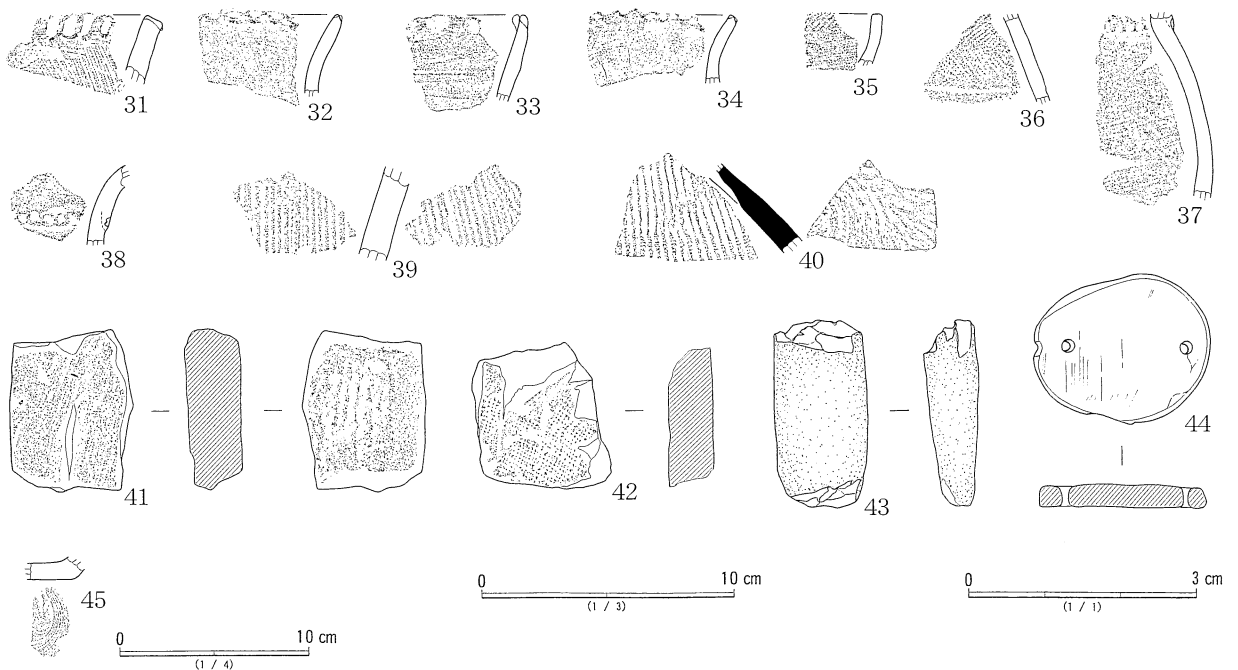


第13図 東関山古墳遺構実測図

3トレンチ



第14図 東関山古墳周溝復元図 (1:1,000) ・遺構実測図



第15図 東関山遺物実測図

断しておらず、何らかの築造計画や単位の基準があったと想定されるが、前方部の周溝位置を墳丘の残存する前方部と、調査が実施された前方部前面部の間に収めることを第1とした。また、築造には様々な基準が考えられるが、ここでは1区=12.5m=約8尋、1尋概ね155cm前後とした^(註4)。結果として内法で後円部径50m、全長90m、周溝幅10mの相似形周溝を有する前方後円墳として復元しても、想定上の北野天神山古墳の盾形周溝とは重複しない。ただし、外側の二重周溝と想定された区画溝の復元案は、永沼氏の想定する北野天神山古墳の後円部周溝と確実に重複してしまい、北野天神山古墳に後出して東関山古墳が構築された場合には、二重周溝の可能性は低いと言わざるを得ない。しかし、この二重周溝の溝は、調査地点の何れからも（深道遺跡2次調査区域では想定外の範囲から類似した幅の溝が検出され、前方部検出溝との距離がほぼ等しい。）相似形周溝と平行する状態で検出されており、古墳築造の前後関係によっては、現状では二重周溝説を完全に否定することもできないと言えよう。

註及び引用参考文献

- 註1 安藤広道 「弥生時代集落群の地域単位とその構造—東京湾西岸域における地域社会の—位相—」
『考古学研究』第50巻第1号 考古学研究会2003
- 註2 永沼律朗 「市原市菊間古墳群」『千葉県重要古墳群測量調査報告書』千葉県教育委員会1995
- 註3 高橋康男 「菊間深道遺跡」『市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会1994
田所 真 「菊間深道遺跡B地点」『市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会1995
- 註4 梅澤重昭 「毛野の前方後円墳の系譜」1999
甘粕 健 「前方後円墳の築造企画論と関東・東北の古墳研究」1999
石部正志・宮川 徒 「東北・関東の前方後円墳の築造企画試案」1999

- 梶 國男 「方眼を使った墳丘長 8 分比設計」 1999
坂本和俊 「前方後円墳の築造企画検討のすすめ」 1999
澤田秀美 「前方後円墳築造企画の型式学的研究」 1999
塚田良道 「測量図の比較から古墳の系譜を考える」 1999
黒田 晃 「群馬県高崎市長瀨西遺跡の調査」 1999
若狭 徹 「保渡田八幡塚古墳」 1999

以上『前方後円墳の築造企画』第 4 回東北・関東前方後円墳研究会大会実行委員会1999

尋単位説は、1 尋を古墳時代の男女の平均身長から、男性を約160cm、女性を150cm前後とする前掲石部・宮川説を参考とした。古墳築造は男女共同で行うものと考え、男女同数（夫婦）で古墳築造に参加した場合の 1 尋として、両者の平均、つまり 1 尋約155cm前後を想定した。

第4表 遺物観察表

遺跡 番号	番号	実測 番号	器 種 遺存度	出土 トレンチ	法 量 (推定)cm			(外)色調 (内)色調	焼成	胎土	特 徴	備 考
					口径	底径	器高					
セー 373	1	1	須恵器高台付坏 底部1/8	1		(8.6)		N6/0灰色	良好	密	内外 ロクロ成形。	
	2	2	須恵器坏 口縁1/30~底部1/4弱	2	(12.2)	(6.8)	3.2	2.5Y7/1灰白色	良好	密	内外 ロクロ成形。底部の切り離し不明。	
	3	1	土師器坏 1/4弱	2	(12.6)	(6.8)	3.4	5YR6/6橙色 5YR5/6明赤褐色	良好	密	内外 ロクロ成形。底部下端は飽ケズリか? 磨耗により不明。	内外 ロクロ成形。底部下端は飽ケズリか? 磨耗により不明。
	4	1	土師器高台付坏 底部ほぼ完存	2		6.3		5YR7/6橙色 5YR8/3淡橙色	良好	密	内外 ロクロ成形後、高台貼り付後底部ナデ。	
	5	3	カワラケ 口縁1/8	2	(6.3)	(5.4)	1.7	5YR6/6橙色	良好	密	外 体部段ナデを施し、屈曲顕著。 内 見込みナデ調整不明。平坦で、口縁付近で立ち上がる。	13世紀?
	6	1	瀬戸・美濃系陶器 緑釉小皿	3	9.2	3.9	2.35	2.5Y8/1灰白色	良好	密	外 底部右回転系切痕無調整。体部丸みを帯びる。口縁灰釉。 内 見込み平坦で口縁灰釉。	後IV期(新) よく使用されている。
	7	5	東海系罏釜 1/16	2				5Y2/1黒色 7.5YR8/6浅黄褐色	良好	密	外 体部成形後罏貼付、上下ナデ調整。 内 ナデ。	15C後半?罏下面に煤付着。
	8	2	環状土鉢3/2	1				10YR5/6黄褐色	良好	密		径2.5cm高4.7cm孔(最小)0.75cm(最大)1.1cm
	9	6	桃の種	2				N1.5/0灰色	良好	密		径1.7cm高さ2.4cm厚さ1.5cm
	10	3	小柄・柄部完形	1				10YR3/4暗褐色				柄径0.35cm高さ1.45cm切羽口径0.55cm高さ 1.5cm
	11	7	寛永通宝	2				10YR3/4暗褐色				径2.35~2.40cm幅0.1cm方形孔0.5cm
セー 376	1	2	縄文土器深鉢 口縁部	1				10YR5/3にぶい黄褐色 10YR2/4灰黄褐色	良好	密		早期条痕文系土器。
	2	3	縄文土器深鉢 胴部	1				7.5YR6/4にぶい橙色	良好	密		早期条痕文系土器。
	3	1	縄文土器深鉢 胴部	1				7.5YR6/4にぶい橙色 7.5YR7/3にぶい橙色	良好	密		早期条痕文系土器。
	4	1	縄文土器深鉢 口縁部	3				7.5YR6/6橙色	良好	密		早期条痕文系土器。
	5	4	縄文土器 口縁部	1				5YR5/4にぶい赤褐色	良好	密		時期不明
	6	11	縄文土器深鉢 口縁部	1				7.5YR6/4にぶい橙色 7.5YR6/6橙色	良好	繊維含む		早期条痕文系土器。
	7	8	縄文土器深鉢 胴部	1				7.5YR6/4にぶい橙色 10YR4/2灰黄褐色	良好	繊維含む		早期条痕文系土器。
	8	7	縄文土器深鉢 胴部	1				10YR6/4にぶい黄褐色	良好	繊維含む		早期条痕文系土器。
	9	10	縄文土器深鉢 胴部	1				7.5YR6/4にぶい橙色	良好	繊維含む		早期条痕文系土器。
	10	6	縄文土器深鉢 胴部	1				5YR5/6明赤褐色 7.5YR6/4にぶい橙色	良好	繊維含む		早期条痕文系土器。
	11	9	縄文土器深鉢 胴部	1				2.5YR5/6明赤褐色 7.5YR5/6明褐色	良好	繊維含む		早期条痕文系土器。
	12	2	縄文土器深鉢 胴部	3				7.5YR6/6橙色 7.5YR6/4にぶい橙色	良好	繊維含む		早期条痕文系土器。
	13	5	縄文土器深鉢 胴部	1				7.5YR6/6橙色 5YR5/6明赤褐色	良好	繊維含む		早期条痕文系土器。
	14	2	縄文土器深鉢 胴部	2				7.5YR6/4にぶい橙色	良好	繊維含む		早期条痕文系土器。
	15	1	縄文土器深鉢 胴部	3				7.5YR5/4にぶい褐色 10YR5/3にぶい黄褐色	良好	繊維含む		早期条痕文系土器。
16	15	埴輪 口縁部	1				5YR6/8橙色	良好	密	外 縦ハケ。 内 横ハケ。		
17	13	埴輪 胴部	1				2.5YR6/6橙色	良好	密	外 縦ハケ。 内 ナデ。	台形タガ	
18	4	埴輪 胴部	3				2.5YR5/6明赤褐色	良好	密	外 縦ハケ。 内 ナデ。	台形タガ	
19	14	埴輪 胴部	1				5YR4/6赤褐色 10YR4/2灰黄褐色	良好	密	外 縦ハケ。 内 ナデ。	台形タガ	
20	1	埴輪 胴部	2				2.5YR5/6明赤褐色	良好	密	外 縦ハケ。 内 ナデ。	台形タガ	
21	5	埴輪 胴部	3				5YR6/6橙色	良好	密	外 縦ハケ。 内 ナデ。		

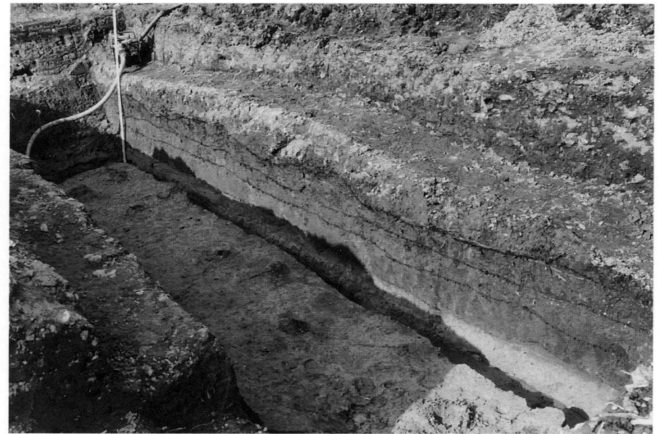
遺跡 番号	番号	実測 番号	器種 遺存度	出土 トレンチ	法 量 (推定)cm			(外)色調 (内)色調	焼成	胎土	特 徴	備 考
					口径	底径	器高					
	22	12	埴輪 基底部	1				5YR6/6橙色	良好	密	外内 縦ハケ。 ナデ。	
	23	1	埴輪 基底部	7				2. 5YR5/6明赤褐色	良好	密	外内 縦ハケ。 ナデ。	
	24	16	須恵器	1				N-5/0灰色	良好	密	外内 平行タタキ。 スリケン。	
	25	1	焙烙 口縁1/8弱	5	(28.6)	(26.6)	(4.3)	10YR3/2黒褐色 10YR6/4にぶい黄褐色	良好	密	外内 ナデ。 ナデ。	内耳土器
七一 378	1	1	弥生甕 口縁部全欠・全体2/3	8		6.8		7. 5YR5/3にぶい褐色 7. 5YR4/6褐色	良好	密	外内 ハケ後鏡ミガキ、胴部の一部に細縄文が残る。 器面磨耗激しい。	
	2	8	弥生甕 底部完存～胴部1/2弱	8		5.6		5YR3/2暗赤褐色 5YR4/4にぶい赤褐色	良好	密	外内 ハケ。 器面剥離激しい。	弥生中期。環濠内出土
	3	2	弥生甕 底部完存	8		6.8		5YR4/4にぶい赤褐色 5YR3/2暗赤褐色	良好	密	外内 鏡ナデ(鏡ケズリに近い) ナデ(器面磨耗やや激しい)	弥生中期。環濠内出土
	4	3	弥生甕 底部完存	8		6.0		7. 5YR4/3褐色 10YR5/4にぶい黄褐色	良好	密	外内 鏡ナデ(やや剥離している) 鏡ナデ。	弥生中期。環濠内出土
	5	8	弥生甕 底部1/2弱	一括		(8.0)		10YR4/6褐色	良好	密	外内 器面磨耗激しい。 鏡ナデ。	弥生中期。環濠内出土
	6	5	弥生甕 底部完存	8		6.8		10YR4/2灰黄褐色 10YR6/4にぶい黄褐色	良好	密	外内 鏡ナデ。 鏡ナデ。	弥生中期。環濠内出土
	7	1	弥生甕 底部1/4	9		(6.6)		10YR5/3にぶい黄褐色	良好	密	外内 ナデ、器面磨耗やや激しい。 ナデ、器面磨耗やや激しい。	弥生中期。環濠内出土
	8	4	弥生甕 底部完存	8		6.0		10YR6/4にぶい黄褐色 7. 5YR6/6褐色	良好	密	外内 器面磨耗激しい。 器面剥離激しい。	弥生中期。環濠内出土
	9	6	弥生甕 底部1/2強	8		5.0		7. 5YR5/4にぶい褐色	良好	密	外内 鏡ナデ。 器面剥離激しい。	弥生中期。環濠内出土
	10	1	土師器高坏 口縁・脚部欠	5	(16.0)			2. 5YR4/4にぶい赤褐色	良好	密	外内 鏡ケズリ後鏡ミガキ。 鏡ミガキ。	内外面赤彩。
	11	1	土師器埴 口縁部全欠 胴部1/6	11	(9.0)			10R3/6暗赤褐色 5YR3/6赤褐色	良好	密	外内 ナデ。 ナデ、輪積痕あり。	内外面赤彩。
	12	9	土師器埴 口縁1/6	8	(9.6)			7. 5YR3/1黒褐色 2. 5YR3/4暗赤褐色	良好	密	外内 ナデ。 ナデ。	内面赤彩。
	13	1	土師器坏 口縁1/8	16	(13.4)			10R3/6暗赤褐色	良好	密	内外面磨耗激しいが赤彩の痕跡が残る。	内面赤彩。
	14	3	土師器坏 口縁1/8	一括	(12.8)			7. 5YR6/6褐色	良好	密		
	15	1	土師器坏 口縁1/8	4	(10.8)			10YR5/3にぶい黄褐色 10YR3/1黒褐色	良好	密	外内 口縁部ナデ、体部鏡ケズリ。 ナデ。	黒色処理。
	16	1	須恵器蓋 口唇部全欠 天井部1/4弱	7	(12.0)		(3.8)	7. 5Y5/1灰色	良好	密	外内 ロクロ。天井部ケズリ、他ナデ。 ナデ。	
	17	5	縄文土器深鉢 胴部	1				10YR4/2灰黄褐色 5YR4/4にぶい赤褐色	良好	繊維含む	外内 条痕文。 条痕文。	早期条痕文系土器。
	18	3	縄文土器深鉢 胴部	1				10YR3/1黒褐色 7. 5YR4/3褐色	良好	繊維含む	外内 条痕文。 条痕文。	早期条痕文系土器。
	19	4	縄文土器深鉢 胴部	1				10YR4/2灰黄褐色	良好	繊維含む	外内 条痕文。 条痕文。	早期条痕文系土器。
	20	6	縄文土器深鉢 胴部	1				10YR3/1黒褐色 5YR4/4にぶい赤褐色	良好	繊維含む	外内 条痕文。 条痕文。	早期条痕文系土器。
	21	1	弥生甕 口縁部	17				10YR4/2灰黄褐色 7. 5YR4/6褐色	良好	密	外内 口唇部指頭押捺波状文。 口唇部指頭押捺波状文。	
	22	2	弥生甕 口縁部	3				7. 5YR3/1黒褐色	良好	密	外内 口唇部指頭押捺波状文。 折り返し口縁。	
	23	1	弥生甕 口縁部	3				5YR4/4にぶい赤褐色	良好	密	外内 口唇部指頭押捺波状文、他鏡ナデ。 鏡ナデ。	
	24	2	弥生甕 口縁部	9				7. 5YR4/6褐色	良好	密	外内 口縁部指頭押捺波状文。 折り返し口縁。	
	25	1	弥生甕 口縁部	1				10YR6/4にぶい黄褐色	良好	密	外内 口唇部原体押捺、他ナデ。 ナデ。	
	26	1	弥生鉢? 口縁部	6				7. 5YR2/1黒色 7. 5YR3/4暗褐色	良好	密	外内 口唇部棒状工具による刻み。 鏡ミガキ。	
	27	10	弥生甕 胴部	一括				7. 5YR4/4褐色	良好	密	外 櫛描き浪状文を施す。	
	28	2	弥生甕 頸部	1				7. 5YR5/3にぶい褐色	良好	密	外内 頸部原体押捺、他ナデ。 ナデ。	

遺跡 番号	番号	実測 番号	器 種 遺存度	出土 トレンチ	法 量 (推定)cm			(外)色調 (内)色調	焼成	胎土	特 徴	備 考
					口径	底径	器高					
	29	11	弥生壺 胸部	一括				7.5YR6/6橙色	良好	密	外 頸部細縄文を施す。	
	30	3	須恵器甕 胸部	6				10YR4/1褐灰色	良好	密	外 併行タタキ。 内 ナデ?	
	31		有孔円盤 1/2	表採								滑石製。径2.0cm厚み1.5~2.0cm重さ1.5g径1.8cmの双孔が貫通する。
七一 384	1	1	土師器高坏 坏部1/6	2	(14.0)			2.5YR4/4にぶい赤褐色	良好	密	外 篋ケズリ。 内 篋ナデ。	内面赤彩。
	2	3	土師器高坏	1		(10.0)		5YR6/6橙色	良好	密	外 器面磨耗激しい。 内 器面磨耗激しい。	磨耗により赤彩とぶ。
	3	7	須恵器蓋 口縁1/10	3	(12.8)			10Y5/1灰色	良好	密	外 ロクロ、ナデ。	口唇部弱い段
	4	10	須恵器蓋 口縁1/8	3	(16.5)			10Y5/1灰色	良好	密	外 ロクロ。	
	5	6	土師器埴 口縁1/12	3	(11.3)			2.5YR4/4にぶい赤褐色	良好	密	外 篋ミガキ。 内 篋ミガキ。	内外面赤彩。
	6	3	土師器坏 口縁1/16	2	(14.0)			2.5YR4/6赤褐色	良好	密	外 ナデ、他ケズリ。 内 ナデ。	内外面赤彩。
	7	3	土師器坏 口縁1/8	3	(13.0)			10R3/3暗赤褐色 10R3/6暗赤色	良好	密	外 ナデ。 内 ナデ。	内外面赤彩。
	8	1	土師器甕 口縁1/8	3	(15.2)			7.5YR4/6褐色	良好	密	外 ケズリ。 内 篋ミガキ。	
	9	5	土師器坏(有段口縁坏) 口縁1/10	3	(14.6)			7.5YR4/6褐色	良好	密	内 ナデ。	
	10	4	土師器坏 口縁1/10	3	(12.0)			7.5R2/2極暗赤褐色	良好	密	外 篋ミガキ。 内 篋ミガキ。	黒色処理。
	11	2	土師器坏 口縁1/4	3	(11.8)			7.5YR4/6褐色 7.5YR4/2灰褐色	良好	密	外 ナデ、他篋ケズリ。 内 篋ミガキ。	黒色処理。
	12	4	土師器埴 口縁部	3	(8.9)			10YR2/1黒色	良好	密	外 ナデ。 内 篋ミガキ。	黒色処理。
	13	5	土師器坏 口縁1/10	3	(12.4)			7.5YR3/4暗褐色	良好	密	外 篋ミガキ。 内 篋ミガキ。	
	14	1	土師器坏 口縁1/6	3	(12.4)			7.5YR4/6褐色 7.5YR3/1黒褐色	良好	密	外 口唇部ナデ、体部篋ケズリ。 内 ナデ。	黒色処理。
	15	2	土師器坏 坏部1/8	2				7.5YR3/4暗褐色	良好	密	外 篋ミガキ。 内 篋ミガキ。	内外面黒色処理の痕跡がある。
	16	4	土師器長脚高坏 脚部1/4	3	(10.6)			7.5YR4/6褐色 7.5YR3/2黒褐色	良好	密	外 ナデ。 内 ナデ。	7世紀末葉~8世紀代。
	17	6	高坏 脚部	3				7.5YR5/4にぶい褐色	良好	密	外 篋ミガキ。 内 輪積痕3段以上。	前期
	18	2	土師器坏 底部1/4弱	3	(6.6)			10YR5/4にぶい黄褐色 10YR2/1黒色(黒色処理)	良好	密	内外 ロクロ 底部外面糸切りつばなし。	平安時代
	19	1	土師器高台付坏 底部ほぼ完存	1		7.8		2.5YR5/4にぶい赤褐色	良好	密	内外 ロクロ 底部外面貼付高台。	赤彩ではないが、かなり赤っぽい土を使用している。
	20	7	瀬戸・美濃系陶器挿鉢 底部1/8弱	3	(13.2)			5YR2/4極暗赤褐色	良好	密	外 底部~体部に鬼板施釉、光沢あり。 内 揃目頂部の鬼板が使用により磨れているが、あまり使い込んでいない。	後Ⅳ期(新)以降。
	21	1	瀬戸・美濃系陶器深皿 口縁部全欠、底部1/4	3	(16.8)			2.5Y7/4浅黄色	良好	密	外 底部付近~底部右回転糸切り調整するが、底部中央に回転糸切り痕残り。 足を貼付、体部中位以上に灰釉施釉。内 体部中位以上に灰釉施釉、よく使い込む。	後Ⅲ期以降。
	22	3	瀬戸・美濃系陶器 平碗 口縁1/12	3	(14.5)			7.5Y6/2灰オリーブ色	良好	密	外 体部は不明だがやや丸み帯びると思われる。口縁若干くびれる。口唇はするどい。灰釉施釉。内 灰釉施釉。	後Ⅱ期?。
	23	9	カワラケ 底部1/4	3	(5.5)			7.5YR6/6橙色	良好	密	外 底部右回転糸切り痕無調整、外周も無調整で若干突出する。 内 見込み横方向ナデ施さない。	12~13C?
	24	8	カワラケ	3				10YR6/4にぶい黄褐色	良好	密	外 底部右回転糸切り痕無調整だが外周ナデ調整し緩やかに立ち上がる。 内 見込み微弱な横方向ナデ。	12~13C?
	25	7	瀬戸・美濃系陶器 広口壺 口縁1/6	3	(12.0)			7.5Y6/3灰オリーブ黄色	良好	密	外 同一期別の破片によると、肩部に二条一帯の復原筋が一面ある。おそらく底口有蓋であろう。灰釉施釉、光沢あり、安定するが、口唇部は拭き取っている。口縁はあらい三角形状に、外側にはり出す。内 頸部に灰釉かかるが、肩部にはまらない。	
	26	11	龍泉窯系青磁碗 底部1/2	3		6.3		10Y6/2オリーブ灰色	良好	密	外 青磁釉はやや厚く、光沢あり小気泡入る。削り出し高台で疊付の釉を拭き取るが不完全、その内面には施釉しない。内 全面施釉、見込みに劃花文。	1-2類、12C後葉。
	27	6	カワラケ 口縁1/3	3	(7.9)			7.5YR6/4にぶい橙色	良好	密	内外 ロクロ、糸切りつばなし。	
	28	6	カワラケ 底部ほぼ完存~口縁1/3	1	(8.5)	5.2	2.0	7.5YR5/4にぶい褐色	良好	密	外 底部右回転糸切り痕無調整、口縁部横ナデしや立ち上がる。 内 見込みから口縁にかけて、ゆるく立ち上がる。見込み横方向ナデ施さない。	金雲母入る。12世紀の可能性があるが不明。
	29	5	カワラケ 口縁1/6	3	(6.4)			10YR6/4にぶい黄褐色	良好	密	外 底部回転糸切り痕無調整だが、外周切りはなし。痕は整える。体部段ナデの屈曲や頭着。内 見込み横方向ナデは不明、平坦で端部ゆるく立ち上がり、口縁に至る。	12~13C?

遺跡 番号	番号	実測 番号	器種 遺存度	出土 トレンチ	法量(推定)cm			(外)色調 (内)色調	焼成	胎土	特 徴	備 考
					口径	底径	器高					
	30	6	カワラケ 底部1/3	3				10YR6/4にぶい黄褐色	良好	密	外内 底部回転糸切痕無調整で若干突出。見込み微弱な横方向ナデ。	
	31	6	弥生甕 口縁部	2				10YR5/4にぶい黄褐色	良好	密	外内 口唇部棒状工具による刻み、他ハケ。ハケ後ナデ。	
	32	7	弥生甕 口縁部	2				7.5YR6/6橙色	良好	密	外内 口唇部指頭押捺波状文、他篋ナデ。	
	33	7	弥生甕 口縁部	3				10YR6/4にぶい黄褐色	良好	密	外内 口唇部指頭押捺波状文、他ナデ。	
	34	5	弥生甕 口縁部	2				7.5YR6/6橙色	良好	密	外内 口唇部指頭押捺波状文、他篋ナデ。	
	35	8	弥生鉢 口縁部	2				2.5YR4/4にぶい赤褐色	良好	密	外内 口唇部細縄文、他篋ミガキ。	内外面赤彩。
	36	1	弥生壺 胴部	3				10YR6/4にぶい黄褐色	良好	密	外 沈線の上位に羽状縄文を施す。	
	37	3	弥生甕 胴部	3				7.5YR5/3にぶい褐色	良好	密	外 頸部原体押捺文。	
	38	4	弥生甕 胴部	3				7.5YR2/1黒色 7.5YR8/6褐色	良好	密	外 頸部円形刺突文。	
	39	2	埴輪	3				5YR4/4にぶい赤褐色	良好	密	外内 縦ハケ。縦ハケ、段あり。	円孔あり。
	40	4	須恵器甕 胴部	3				10Y3/2オリーブ黒色	良好	密	外内 併行タタキ。円心円文による青海波を半スリケシ。	
	41	1	布目瓦	3				7.5YR6/4にぶい橙色	良好	密	外内 縄文。布目。	
	42	7	布目瓦	1				2.5Y6/3にぶい黄褐色	良好	密	外内 篋ケズリ。布目。	
	43	2	叩き石	3					良好	密		長さ7.4cm幅3.7cm最大厚み2.1cm重量80g。
	44	8	有孔円盤	1					良好	密		滑石製。径3.5cm孔2mm厚さ4mm
	45	5	カワラケ 底部1/3	3				7.5YR6/4にぶい橙色	良好	密	外内 底部右回転糸切痕無調整。見込み不明。	



姉崎山新遺跡調査前



1 トレンチ調査状況



2 トレンチ調査状況



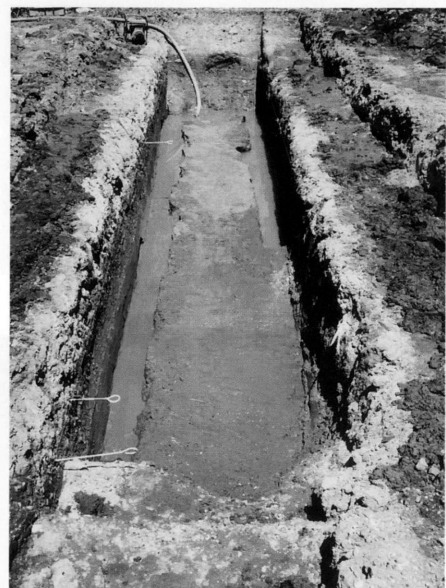
2 トレンチ中央部遺物出土状況



2 トレンチ調査状況



3 トレンチ調査状況 2



3 トレンチ調査状況 1



潤井戸遺跡群下宿地区7トレンチ北より



同7トレンチ南より



潤井戸西山遺跡調査前



1トレンチ南から



2トレンチ南から



1トレンチ溝検出状況



4トレンチ柱穴検出状況



4 トレンチ溝検出状況



5 トレンチ東より



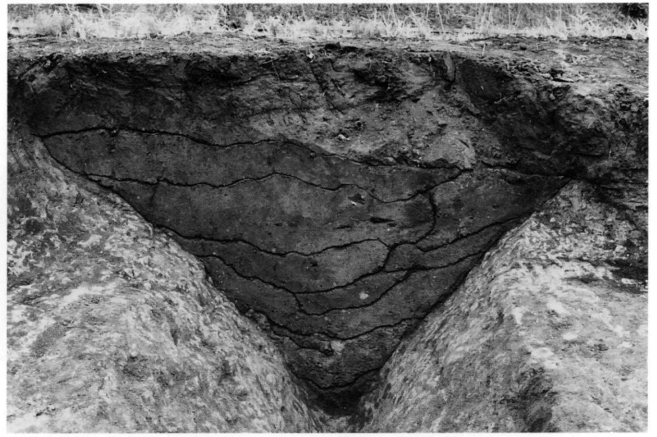
6 トレンチ溝検出状況



7 トレンチ溝検出状況



8 トレンチ溝検出状況



8 トレンチ北側溝土層断面



8 トレンチ中央部遺物出土状況 1



同 2

図版 4



東関山古墳周溝部調査前



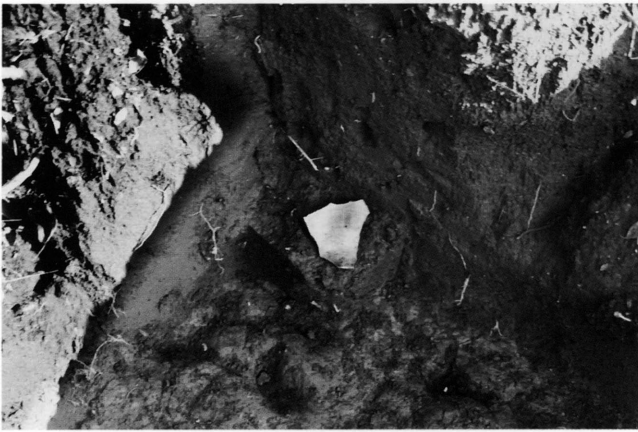
1 トレンチ検出状況



1 トレンチ土層断面



2 トレンチ完掘状況



3 トレンチ東端部遺物出土状況



3 トレンチ東端部遺構検出状況



3 トレンチ地下式墳検出状況 1



同 2

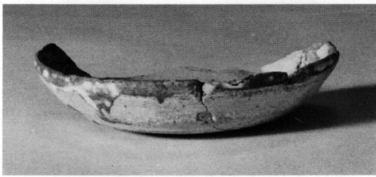


3 トレンチ土層断面



東関山古墳南周溝立ち上がり

出土遺物



セ373-6



セ373-10



セ373-11



セ378-2



セ378-4



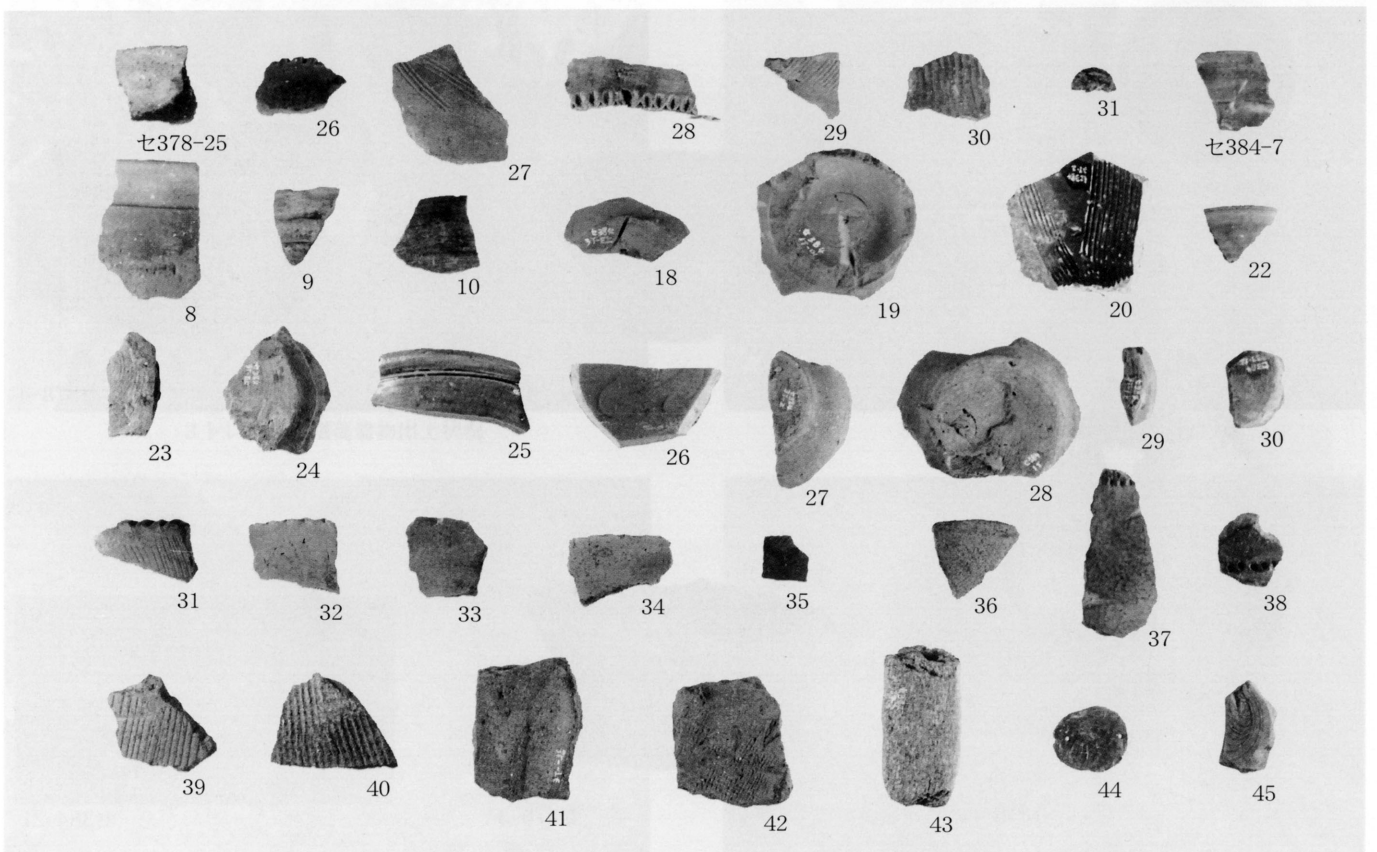
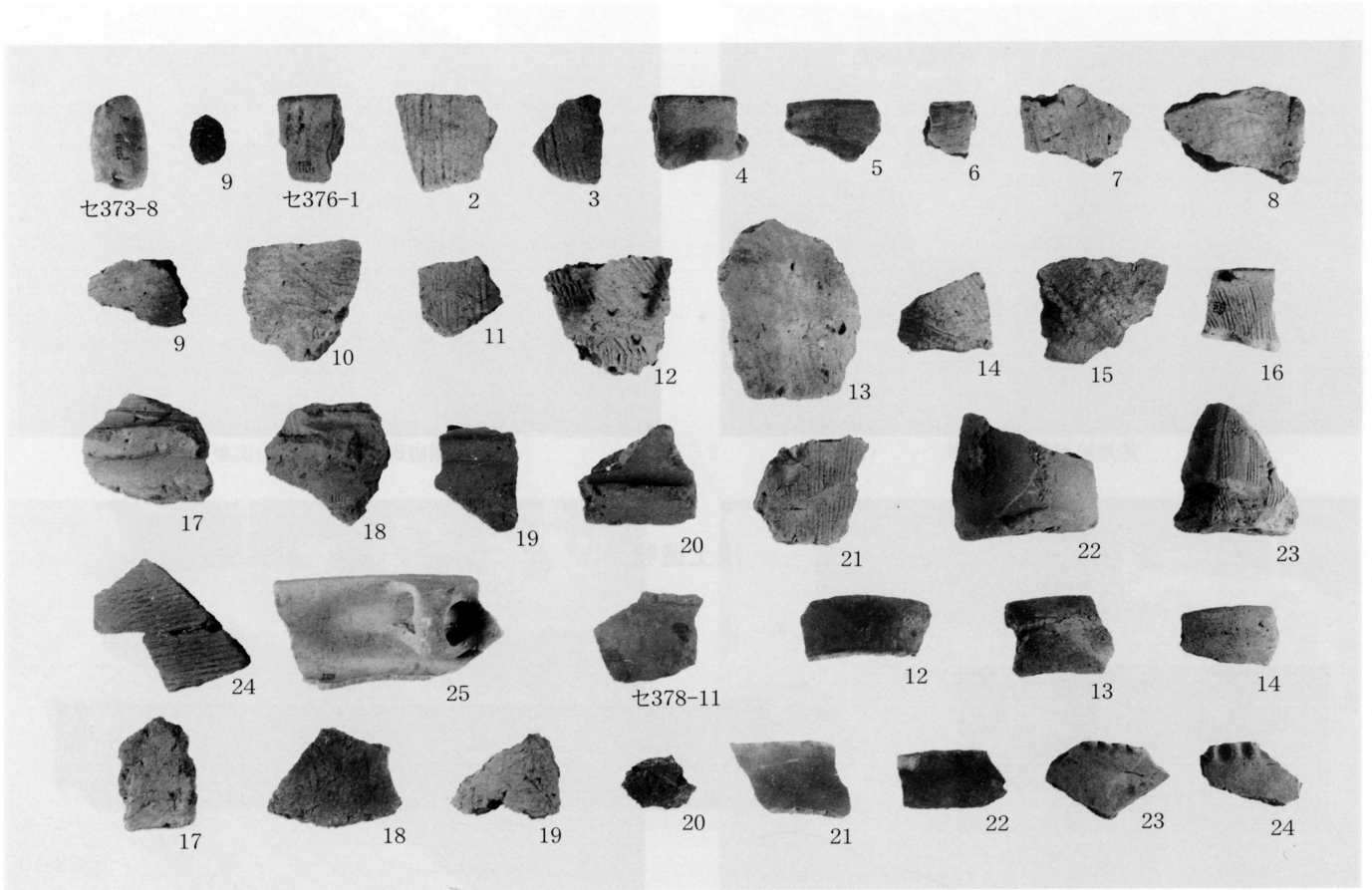
セ378-1



セ378-3



セ384-21



報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうごねんどいちほらしないはくつちようさほうこく
書名	平成15年度市原市内発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	市原市内遺跡発掘調査報告書
シリーズ番号	第17冊
編著者名	木對和紀
編集機関	財団法人 市原市文化財センター
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 TEL 0436 (41) 9000
発行年月日	2004年3月24日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あねさきさんしん いせき 姉崎山新遺跡	いちほらし あねさきあざのほうた 市原市姉崎字向畑 1714-5	12219	セ-373	35° 28′ 47″	140° 03′ 18″	20030414 ～ 20030422	102m ²	集合住宅建設
うるいど いせきぐん 潤井戸遺跡群 しもじゆくちく 下宿地区	いちほらし うるいどあざ 市原市潤井戸字 しもじゆく 下宿 686-2ほか	12219	セ-376	35° 31′ 16″	140° 10′ 12″	20030512 ～ 20030519	40m ²	個人住宅建設
うるいどにしやまいせき 潤井戸西山遺跡 くさかりおなしせき (草刈尾梨遺跡)	いちほらしくさかり 市原市草刈194-1の一部 ほか	12219	セ-378	35° 30′ 47″	140° 10′ 40″	20030702 ～ 20030716	350m ²	店舗建設
きくまこふんぐん 菊間古墳群 とうかんやまこふん (東関山古墳)	いちほらし きくま 市原市菊間2751-2	12219	セ-384	35° 32′ 10″	140° 08′ 53″	20031119 ～ 20031128	60m ²	個人住宅建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
姉崎山新遺跡	包蔵地	平安時代 中世	中世溝1条、中世以降2条	縄文土器・土師器・須恵器・中世陶器・かわらけ	
潤井戸遺跡群 下宿地区	包蔵地	縄文時代 古墳時代		縄文土器・土師器・埴輪	
潤井戸西山遺跡	包蔵地	弥生時代 古墳時代	弥生環濠2条、古墳後期溝1条、住居跡残骸5軒	弥生土器・土師器・須恵器・石製模造品	今回の調査成果によって、弥生環濠集落の推定面積は、環濠集落としては標準規模の2万m ² 前後に復元することが可能となった。
東関山古墳	古墳	古墳時代 中世	東関山古墳周溝、中世溝、地下式土壇	弥生土器・土師器・須恵器・石製模造品・中世陶器・かわらけ	今回の調査成果によって、東関山古墳を全長90mの前方後円墳に復元することが可能となった。

平成15年度 市原市内遺跡発掘調査報告

平成16年3月18日 印刷

平成16年3月24日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター
市原市能満1489

発行 千葉県市原市教育委員会
市原市国分寺台中央1-1-1

印刷 三陽工業株式会社